



福知山公立大学 地域経営学部
地域協働型教育

2020年度 成果報告書

はじめに

本学は“市民の大学”“地域のための大学”“世界とともに歩む大学”という基本理念を掲げています。この基本理念に基づいて本学・地域経営学部は「地域協働型教育」に取り組んでいます。初年次から4年次まで、学部生全員がそれぞれに選択したテーマにしたがって担当の教員とともに地域を訪問し、住民の方々と交流・協働して地域の課題を発見し、解決の方策を検討するという授業です。

本報告書は、2020年度のこの授業の概要を中心に、学生たちが自主的に取り組んだ「学生プロジェクト」、インターンシップの「地域キャリア実習」なども含めてまとめたものです。今年度から始めた「卒業研究」のテーマ一覧も掲載しております。

開学以来5冊目の報告書になりますが、本年度もこの報告書が出せたことには特別の喜びがあります。

ご存知のとおり「コロナ禍」の中で、前学期はほとんど地域に向くことができなかつたため、報告書が作られるのかどうか少々心配でした。しかし、こうして報告書が出せたばかりか、これまでのものと比べても遜色のない報告書になっています。特に、対面授業が後学期のみになってしまった1年生の学生たちが「学生の気づき」欄にしっかりと書いてくれていることを嬉しく思います。

また、本年度は卒業していく4年生3人との座談会の様子を冒頭に掲載させていただきました。日程の折り合いがつかず、医療福祉経営学科4年生の代表を含むことができなかったのは残念でしたが、学生諸君が4年間で何を学んでくれたのかを読み取っていただければ幸いです。

福知山公立大学 学長
井口 和起

本年度から本学は情報学部の教員や学生たちを迎えました。この新しい学部でも、「地域協働型教育研究」として演習科目群に課題解決型学習「地域情報PBL」を全学年に配置しています。もともと、本年度の学生は1年次ですが、2月15・16日に学内で報告会を開き成果を報告しています。これは本報告書には収録されていませんし、こんな冊子になるかどうかはわかりませんが、学生たちの学びの様子を広くお知らせできるようになると思います。ご期待ください。

末尾になりましたが、この授業の受け入れ先となってお力添えくださいました地域の方々に篤くお礼申し上げますとともに、地域の方々をはじめご関心をお寄せくださる方々からの厳しいご批判と暖かい励ましが頂戴できれば嬉しい限りです。

目次

| | |
|------------------------|----|
| はじめに | 01 |
| 第1部 福知山公立大学における地域協働型教育 | |
| 1 学長×4年生代表者 座談会 | 03 |
| 2 実践教育フィールド一覧 | 05 |
| 第2部 各ゼミの取り組み報告 | |
| 1 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ(1年生) | 07 |
| 2 地域経営演習Ⅲ・Ⅳ(2年生) | 13 |
| 3 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ(3年生) | 15 |
| 4 卒業研究Ⅰ・Ⅱ(4年生) | 35 |
| 第3部 地域協働型教育成果報告会 | 41 |
| 第4部 学生プロジェクト | 43 |
| 第5部 地域キャリア実習プログラムについて | 47 |

座談会 *Fukuchiyama*



地域経営学科4年
(川西市役所内定)
上野 裕也さん
兵庫県立川西北陵高等学校出身

学長
井口 和起

地域経営学科4年
(社会福祉法人北星会内定)
高原 望乃さん
京都府立宮津高等学校出身

地域経営学科4年
(福知山市役所内定)
大福 暉嵐さん
島根県立平田高等学校出身

福公大での4年間の振り返り 学んできたことと、卒業後について

福知山公立大学2期生が2021年3月に卒業を迎えます。

その学年の代表3名にご登場いただき、学んできたことや卒業の進路などについて、井口学長を交え、座談会を行いました。

4年間の学びを振り返って

井口学長 4年間で振り返ってみて、どのような学びが印象に残っていますか？

高原 地元の宮津市で何かをしたいという思いを持って本学に入学し、実際に宮津と関わる様々なプロジェクトに携わってきました。2年次に立ち上げた「宮津わかもの会議」では実行委員長を務め、第1回の会議で「平成生まれの30歳以下の30名による30の宣言」を作成しました。その後、その「30の宣言」を実現するためのイベントや活動



に取り組み、地域の方々とも幅広く交流できました。

上野 いろいろな活動に取り組みましたが、1つ挙げるとしたら、新町商店街にある一軒家をシェアハウスしたこと。本学の谷口知弘教授が窓口となって学生3人でシェアしており、そこで生活するようになって地域の方々と交流する機会が格段に増えました。例えば、福知山ワンダーマーケットのお手伝いをしたり、まちかどキャンパス「吹風舎」で活動を行う学生団体に入ったり、人脈も大きく広がりました。

大福 私は大好きなスポーツを活用した地域活性化に挑戦したいと考え、福知山マラソンに着目。私自身4年連続でランナーとして参加し、卒業論文も「私がつくる福知山マラソンプロジェクト」をテーマに取り上げました。

卒業論文でも地域活性化を考察

井口学長 卒論のお話が出ましたが、皆さんの書かれたものを読ませていただきました。大福さんは、実際に福知山マラソン実行委員会事務局（福知山市役所文化・スポーツ振興課内）に掛け合せて、コロナ禍を考慮したオンラインでの大会開催の提案を行ったんですね。

大福 中止になり1年間の空白ができるのと、地域振興という観点からのマイナスも大きいと考え、なんとか開催したいと提案しました。「TATTA」という専用アプリを用いてGPS計測で距離を測り、期間内に参加者が42.195kmを走るというもので、最終日には「リアルフィニッシュ」の会場も設置。参加者への記念メダルの贈呈も提案し、実現することができました。

井口学長 高原さんは、卒論でも地元の宮津のことを取り上げていますね。

高原 はい。宮津市が特産にしようとしているオリーブの可能性を考えてみると、「由良オリーブ園を軸とした地域の活性化」について研究しました。農家の方ともつながりができ、卒業後も収穫時のボランティアなどでお手伝いできればと考えています。

井口学長 上野さんは、地元の川西市を中心に、福知山市大江町や豊岡市の里山活用に関する取り組みなどについて調べられました。

上野 川西市には有名な里山があり、研究テーマに取り上げました。卒業後は川西市役所の職員として働くので、卒論で考察した知見を活かしつつ、何ができるかを模索し続けていきたいと思っています。

卒業後の進路について

井口学長 今話題に上がりましたが、上野さんは地元の市役所に就職されたんですね。

上野 はい。将来、地域に関わる仕事がしたいと本学に入学しましたが、それに最も適している職業の一つが市役所の職員かなと思い、志望しました。

大福 私は福知山市役所に就職内定しました。地元に戻ることも考えましたが、福知山マラソンへの参加などを通じて当地への愛着が湧き、ここで自分のやりたいことに全力で取り組みたいと思うようになりました。

高原 私は宮津市にある社会福祉法人で働きます。地元の小



学校の放課後児童クラブでアルバイトをしており、それを管理しているのが同法人で、お声がけいただきました。地域交流を図るイベントの企画・運営なども行っているの

そうした仕事にも積極的に関わっていきたくです。

井口学長 生まれ故郷でも、大学がある福知山市でも、卒業生の皆さんが地域に定着し、本学で学んだことを活かして仕事をしてくださるのが私たち教員の一番の喜びです。皆さんの話を伺って、期待を大きくするとともにうれしく思いました。



今後の抱負と大学への提言

井口学長 最後に、今後の抱負や本学への提言があれば、お聞かせください。

大福 私たちは2期生になりますが、今後卒業生の数も多くなっていくと思います。卒業後も相互的にコンタクトが取れれば、在学生にとっては就職活動の情報収集に役立つでしょうし、地域と大学のつながりもより深くなるので、そういった仕組みを作っていただきたいです。

井口学長 卒業生たちを対象に、「今こういことをやっている」「私の地域ではこういう問題を抱えている」といったレポートを集めた機関紙を現在構想中です。積極的に卒業生の方にアプローチしていただけるのはありがたいことです、ぜひ実現できればと思います。

高原 提言としては、本学がある北近畿の高校とのつながりを深め、活動できる機会が増えるといいなと思いました。抱負としては、大学4年間で学んだ「人とつながりの大切さ」をこれからも大事にしながら、仕事を通じて地域を盛り上げていければと思います。

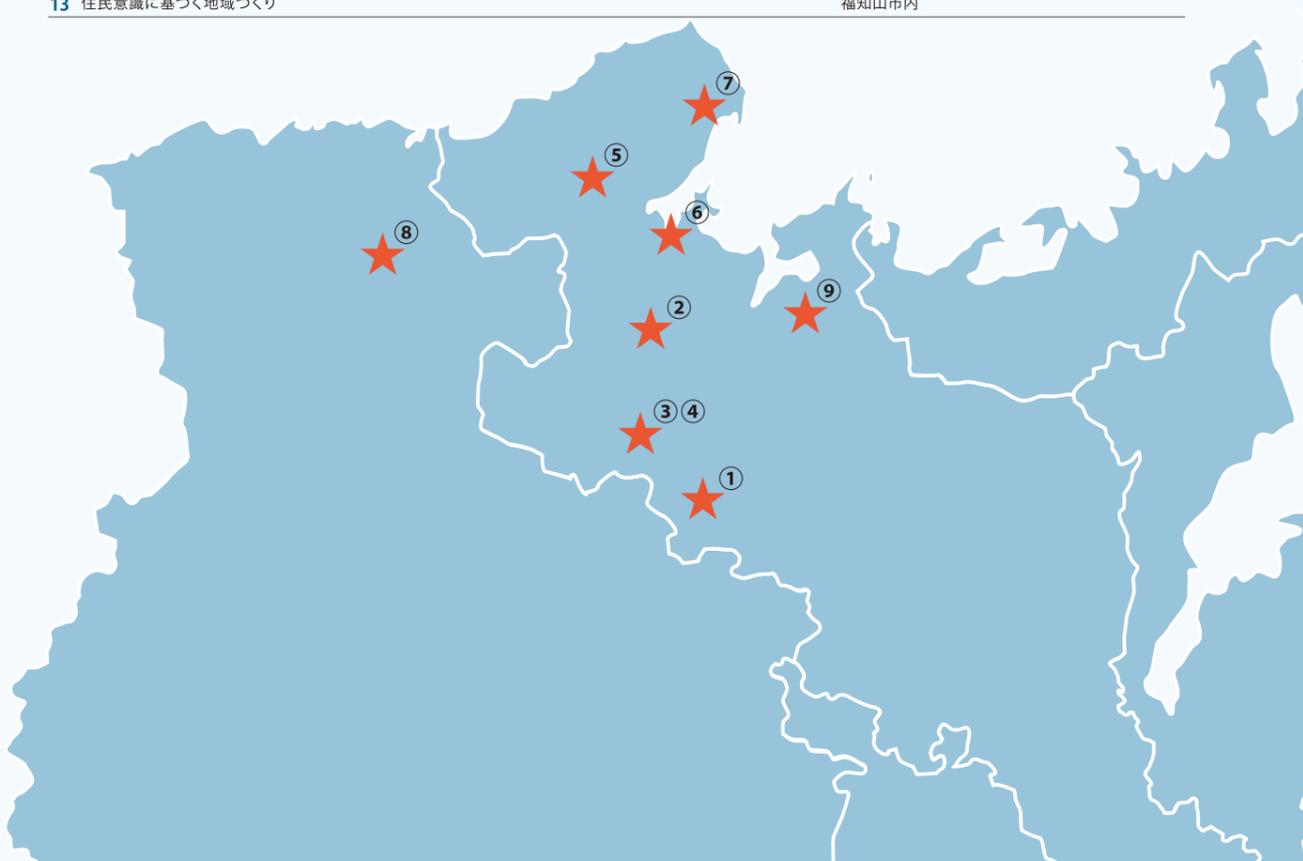
井口学長 高校とのつながりで言いますと、先生方は依頼に基づき、個別に出張講義を行ったりしていますが、出身者の本学在校生を交えた取り組みは確かに弱いかもかもしれません。今後、検討してみます。

上野 私も人とつながりを大切にするのはもちろん、いつまでも学びつづける姿勢を貫いていきたいですね。所属専科とは別の情報学部で授業を受講したり、市民交流プラザでの公開講座に参加したり、いろいろなことに興味を持ち、学ぶ姿勢を在学中に身につけることができたので、就職後も大切にしていければと思います。

井口学長 卒業してから生涯学び続ける意欲と、いろいろなことに興味、関心をいかに持ち続けられるか。そこを大学で一番学んでほしいと常々思っていますが、皆さんの言葉を聞いて心強く感じました。今後のご活躍にも期待しています。

実践教育フィールド一覧

| 頁 | 取り組み名 | 地図番号 自治体名 |
|----|---|-----------------|
| 07 | 福知山市三和町の地域課題 | ① 福知山市三和町 |
| 07 | 万願寺甘とうとの挑戦 ～今までとこれから～ | 福知山市三和町 |
| 07 | まるごと資源 ～大原神社とまちをつくる資源たち～ | 福知山市三和町 |
| 07 | 福知山の交通 ～三和地域を中心に～ | 福知山市三和町 |
| 07 | 農業の未知なる可能性の探索 ～三和地域～ | 福知山市三和町 |
| 07 | 三和学園について | 福知山市三和町 |
| 08 | 福知山市夜久野町における地域カルテ作成のためのデータ整理および図案の提案 | 福知山市夜久野町 |
| 09 | 大江町の現状と課題 | ② 福知山市大江町 |
| 09 | 大江町における空き家問題 | 福知山市大江町 |
| 09 | 大江町の1ターン・Uターンはどうすれば増えるか | 福知山市大江町 |
| 09 | 大江町の観光と鬼伝説 | 福知山市大江町 |
| 09 | 由良川と大江 ～防災の観点から見る現在について～ | 福知山市内 |
| 10 | 地域との協働実践を通してプロジェクトマネジメントを学ぶ | ③ 福知山市内 |
| 10 | 子どもから高齢者までの多世代交流の場を作る～公民館のふれあいコンサートを通じて | 福知山市内 |
| 10 | コロナ禍でつながりをつくる試み～大正地区公民館「つながる広報プロジェクト」への参画 | 福知山市内 |
| 11 | 大学生も地域資源～旧川合小だから出来ること～ | 福知山市内 |
| 11 | 信号機がなくてもダイジョウブ?～新しい横断歩道の渡り方～ | 福知山市内 |
| 11 | 六人部PAで新商品を開発してみた | 福知山市内 |
| 12 | 地域の福祉と交通の課題 | 福知山市内 |
| 12 | 社会福祉協議会が直面している地域課題とその解決方法 | 福知山市内 |
| 12 | 北近畿と福知山の鉄道交通 | 福知山市内 |
| 13 | 1人1プロジェクトリーダー制による地域協働政策ゼミ | 福知山市内、与謝野町、京都市内 |
| 13 | 住民意識に基づく地域づくり | 福知山市内 |



| 頁 | 取り組み名 | 地図番号 自治体名 |
|----|---|----------------|
| 14 | 病床機能報告データウェアハウスを用いた中丹医療圏における地域医療構想分析 | 福知山市内 |
| 14 | 保健・医療に関する 様々な社会問題を知り、自らの社会的課題を見出す | 福知山市内 |
| 15 | 福知山市の企業数減少を食い止める-福知山から発信するオンライン事業承継塾- | ④ 福知山市内 |
| 16 | 卒業研究に向けた諸活動 -教育問題を題材としたテーマ設定と資料収集および質問紙の作成- | 学内 |
| 17 | 北近畿地域が抱える課題発見と解決への方策の検討「福知山市における廃校問題の調査と提案」 | 福知山市内 |
| 18 | DPCデータを用いた病院情報データウェアハウスの構築 | 学内 |
| 19 | キャリアパスを意識した能力開発-業界・企業分析レポート- | 学内 |
| 20 | VRで広がる地域-キャラクタープランディングと汎用3Dモデルの制作- | 福知山市内 |
| 21 | 地方創生事業におけるソーシャル情報ハブ機能の考察 | ⑤ 京丹後市 |
| 22 | 人口減少社会の課題を克服する福祉の学習 | ⑥ 宮津市 |
| 23 | 労働社会学と地域雇用政策の研究 | 福知山市内 |
| 24 | 観光地域づくりを巡る諸問題を考える | ⑦ 伊根町、京丹後市 |
| 25 | 保健・医療に関する様々な社会問題の実情を把握し、社会問題に巻き込まれた人々を安心に導く方法を見出す | 学内 |
| 26 | 多様性のある世界を目指して-異文化理解について考える | ⑧ 豊岡市、福知山市 |
| 27 | 文理融合型経営学の演習 | 学内 |
| 28 | サードプレイスを中心としたProject Based Learning | ⑨ 豊岡市、福知山市、舞鶴市 |
| 29 | 地域社会の問題解決を試みる地域協働プロジェクトの実践 | 福知山市内 |
| 30 | 多自然圏の活性化に関する研究 | 各自治体 |
| 31 | 災害時における自治体連携 | 福知山市内 |
| 32 | 地域における病院が抱える課題を経営の視点から検討(名桜大学とのアカデミックな交流を通じて) | 沖縄県 |
| 33 | 事業承継税制に関する考察 | 学内 |
| 34 | 実データに基づく分析と検討 | 学内 |



福知山市三和町の地域課題



科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-A

担当者名 中尾 誠二・亀井 省吾

万願寺甘とうとの挑戦 ～今までとこれから～

YouTuberや声優などは若者に人気があるのに対し、農業の印象は良いとは言えない。しかし農業従事者は、そのような農業の範囲内から若者にアプローチを続けている。若者が振り向かないのも当然である。では「農業＝生産」という固定概念を壊してみてもどうか。要は「これまでの農業」に「若者からの需要を得る要素」を組み合わせるのである。今回その一案として、「SNS」と「ある要素」を用いた農業の再定義を主張する。構成として、まずは株式会社Season様の歴史を年ごとに紹介し課題を分析する。その後コストを最小限に抑えつつ、かつ非常時の際にも収入を得ることを可能とする一案を提示する。

まると資源 ～大原神社とまちをつくる資源たち～

大原神社と、それを囲み、それとつながる資源について確認を行い、それを生かすより一層のまちの活性化のための提案を行う。資源の確認では、経営資源という観点から、ヒト、モノ、カネ、情報の4つの資源に大きく分け、それぞれがどのような資源であり、まちとどのようなつながりがあるのか等の確認を行う。そこから、気づいたことや考えられることを踏まえながら、既に行われているまちづくりについて確認した後、まちづくりの提案を行う。

農業の未知なる可能性の探索 ～三和地域～

私は、三和地域の農業について調べた。初めに、三和地域だけに限定されない全国の農業の現状(課題)を具体的に明示し、三和地域の特産物や農業発展の取組をいくつか紹介する。そのうえで、それらに関連付けた、もしくは現状の課題から掘り下げた解決策をオブザーバーの方々に提示し、また、解決策を施行する段階で生じる新たな課題にも着目し、まとめとして農業の未知なる可能性を探索した結果を発表する。三和地域の要素を薄く感じる場面もいくつか見られると思うが、それに関しては私の発想の限界ということで、ご了承ください。

学生の気づき

私は一年間、中尾・亀井教授のご指導の下、三和町に関する地域課題解決の取組を行ってきました。第一回目の講義を受ける以前、私は過疎地域に長所を見出すことができませんでした。その時の私は、交通が不便、行動できる幅が狭い、高齢者が多いなどといったような良いところを探そうともしない考えを持っていました。しかし、地域経営演習というゼミを通して、地域住民の温かさや自然と都会の双方を味わうことのできる利点などに気付かされました。その中でも特に印象に残っている出来事があります。それは三和学園にお伺いさせていただき、小学生と質疑応答をして交流を深める場を設けていただいた際に、小学生同士が一人も欠けずに分け隔てなく仲良く話しており、さらに私たち大学生にその地域に住んでいるからこそ知っている魅力を教えてくれたことです。そのとき、私は都会の広く浅い関係よりも過疎地域の狭く深い関係に大変羨ましく感じました。今では、入学当初の自分の考えがどれだけ浅かったのかが身に染みて分かります。そのため、こんなに魅力的で活発的な過疎地域がどのように、どういった人々によって発展できるのかを今後の大学生活で研究(学習)していきたいと感じました。

VOICE 松林 夏希
地域経営学科 1回生 京都府立鳥羽高等学校(京都府) 出身

福知山の交通 ～三和地域を中心に～

私達の班は、福知山(特に三和地域)の交通について発表する。地域公共交通を取り巻く背景、有償運送、ひまわりライド、その現状、課題、まとめ、という構成で発表していく。

まず、背景としては少子高齢化や人口減少により、利用者の減少がみられる。これによる収入減少等により廃線が問題となっている。次に、有償運送の中で、みまわりライドが、公共交通空白地有償運送事業の一つである。毎年新規登録者があり、総数としては増加の傾向がある。この現状を維持することが大切であり、高齢者にもわかりやすい仕組みを考えるべきである。その策として、会員登録料の500円を初回利用時の料金としたり、電話での手続きで高齢者にとって優しいものにしたりすることがあげられる。みまわりライドの課題としては、運転手の平均年齢が68.7歳と、高齢傾向があり、いつまで維持できるかわからない。

人口の少ない地域でのこのような課題は、全国的にみられる。三和地域での経験と話をともに様々な計画を立てていくことが、私たちがすべきことである。

三和学園について

三和学園になるまでの歴史、三和学園で行われている三和創造学習について述べた後に、三和学園ができたことによって生まれた廃校の活用現状を述べ、チームで考えた廃校活用を提案する。三和創造学習については、大まかな流れを説明した後、五年生で行う学習に焦点を当て発表する。廃校活用の提案は、まず予算面を考慮せずに企業に向けて企画提案をし、その後企業からアドバイスを求め、予算を含め修正していくという前提を進める。これまで学んできた、三和地域全体を生かした廃校活用を提案する。

特に印象に残ったことは2つある。1つ目は、フィールドワークでSeasonさんのお話を聞かせていただいたことだ。実際に万願寺あまとうの畑を見せていただき、とても広い土地だったので、三和地域は大規模農業がしやすいことを実感することができた。現地調査によってオンラインではわからなかったことが学べたので、地域をより知ることができ、現地調査の大切さを学んだ。2つ目は、三和地域の方々に今まで学んだことを発表したことである。パワーポイントを作成できる時間が短く、不完全な状態だったことは悔やまれるが、あたたかく優しいご意見をいただきとても勉強になった。この機会では大きく3つのことを学んだ。1つ目は、協力することの大切さである。オンラインの場でパワーポイントを作成していたが、協力して作り上げることの大切さを学んだと同時に、オンラインでまとめることの大変さを学んだ。2つ目は、知っている人に発表する内容と知らない人に発表する内容は違うということである。知らない人には専門的な言葉をわかりやすく説明することや、知っている人には学んだことだけでなくそれをどう考えたかなどの意見もいれるなどの工夫が必要であることに気づくことができた。3つ目は、履修認定に活用することである。必ず練習通りになるわけではないのでハブニングが起きた場合に笑いをいれるなどの工夫をして余裕を持つことも必要であることを学べた。この1年間、たくさんのことを学べて、よい経験ができたと感じる。

VOICE 小川 璃々伽
地域経営学科 1回生 新潟県立新潟中央高等学校(新潟県) 出身

福知山市夜久野町の地域課題



科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-B

担当者名 神谷 達夫・江上 直樹

地域カルテ作成のためのデータ整理および図案の提案

地域課題に取り組むためには、一律の施策を実施するだけでなく、地域の現状を見据えたいきめ細やかな取り組みが不可欠とされる。そこで、本クラスでは福知山市夜久野町を対象に、本地域に関連する統計データを整理するとともに、地域の現状を把握するための「地域カルテ」作成に向けた原案を提案した。

具体的な作業として、まず、1995年から2015年の国勢調査における少地域別データについてe-Statからダウンロードし、夜久野町に該当する部分を抜き出して各年度のデータを統合した。そして、表計算ソフトを用いて、そのデータをもとに夜久野町の小地域別(夜久野町の場合は自治会別に相当)の人口推移や将来人口推計がすぐに確認できるデータベースを作成した。また、JSTATMAPを活用し、小地域の境界線を表示させながらgoogle mapに登録されている施設情報を目視で抜き出し、この情報もデータベースにまとめた。これにより、夜久野町において少地域別に年齢別人口構成と将来人口推計および主要な施設情報が確認できるデータベースが完成した。

本年度の取り組みとしては、このデータベースの情報をいかに見やすいかたちで「地域カルテ」としてまとめられるか、その図案を作成したところで終了した。本年度に作成した図案をもとに実際「地域カルテ」をどのように作成するかについては今後の検討課題である。本年度は、新型コロナウイルスの影響で十分な現地調査ができなかったところもあり、今後は特にインターネット上だけでは収集できなかったデータについて収集する必要がある。



学生の気づき

今年度の地域経営演習では、前期は遠隔授業だったため、思った通りの活動はできませんでした。後期の演習は対面で行うことができたため、ゼミのメンバーと協力して取り組むことが出来てよかったです。そのなかでも、後期の演習で行ったフィールドワークが印象的でした。前期の演習で夜久野町について学んでいたため、実際に訪れて地域の方のお話を聞くことができ、良いフィールドワークにすることが出来ました。また、その延長で行った漆塗り体験では、夜久野町の代表的な伝統文化である漆塗りを、地域の方に実際に教えてもらい、貴重な体験をすることができました。演習の後半は、一年間で行ってきた活動のまとめをグループのメンバーで話し合いながら、自発的に意見を出したりするなどの行動をすることが出来てよかったです。

VOICE 堀江 世那
地域経営学科 1回生 島根県立平田高等学校(島根県) 出身

私の家が大学から遠いこともあり、演習も1年間遠隔で参加しました。そのため、対面での参加が可能になった後期に実施されたフィールドワークや漆塗り体験には直接参加することはできませんでした。しかし、先生が遠隔からの参加でも演習に取り組める環境を整備してくださいました。後期の演習が始まる前は不安な気持ちもありましたが、先生がそういった環境を整えてくださったおかげで、対面に参加する形に近い感じで演習に取り組むことができました。遠隔で参加する場合、どうしても対面での参加の場合よりも制限されることはありますが、遠隔でもできることは精一杯取り組むことができたと思います。同じクラスの学生さんにも、遠隔で参加することに対して配慮していただき、感謝しています。新型コロナウイルス感染症の影響が今後どうなっていくかは分かりませんが、1年間演習で取り組んできた内容を活かして、来年度から始まるゼミにも積極的に取り組んでいきたいです。

VOICE 吉田 楓太
地域経営学科 1回生 京都府立海洋高等学校(京都府) 出身

大江町の現状と課題



科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-C

担当者名 山田 篤・倉田 良樹

大江町における空き家問題

大江町の空き家の現状について調査を行い、地区毎の今後の課題について考察した。

e-Statの国勢調査や住宅・土地統計調査等の情報を元に、大江町内の美河、美鈴、有仁の3つの小学校区毎の人口や高齢化率の推移を調べた。次に、福知山市の空き家対策の現状や空き家率について調査し、高齢化と空き家の関係や、大江町の小学校区毎の課題について考察した。今年度はコロナ禍で、現地へ赴いての調査やヒアリングが十分にできなかったが、調査結果から地区毎の特徴が浮かび上がってきた。

大江町のIターン・Uターンはどうすれば増えるか

大江町へのIターン、Uターンを増やすための方策について考察した。国内の他地域での取り組みを中心に調査し、高校の魅力化、サテライトオフィス、移住者支援という3つの方策について考察した。高校の魅力化は全国から高校生を呼び集める方法として北海道三笠高校や島根県立隠岐島前高校の事例を参考に、大江高校でどのような取り組みをすればよいかを考えた。次に、徳島県・神山町でのサテライトオフィスの成功事例を元に働く場所の確保について考察した。最後に、移住者支援の方策として、大江町定住促進団地や鬼の里Uターンプラザの利活用について考察した。

学生の気づき

地域経営演習の講義では、大学一年生という右も左もわからないような中で行われた遠隔講義に何とか食らいついていく学習の中で、知識としての部分は学習の形を自身の中に残せたことは印象に残っている。

特に主体となって動くことを体験し、演習としての学びを自身の力にできたのは、やはり後学期の内容であったと感じている。ただし、後学期でも遠隔講義の希望を出し、他のクラスメイトと同じように教室で講義を受けない中で、自身にできたことは対面授業に参加した同級生たちよりも少なかった事にはわずかながら悔しさを感じた。

しかし、遠隔なりに自分たちにできることは何かということを探しながら、役割分担を果たし協力の末に自分たちでも満足いく発表を行えたのではないかと感じている。

総合的な課題点については、まだまだ経験不足を痛感することが多く中で、如何に大学生活の中で経験の機会を拾い集めていくことについて考えていかなければならないという点だと考えられる。

VOICE 赤西 達哉
地域経営学科 1回生 京都府立加悦谷高等学校(京都府)出身

大江町の観光と鬼伝説

大江町の観光地を鬼関連とそれ以外に分け、それぞれの特徴について考察した。大江町は大江山の酒呑童子伝説に代表される鬼をテーマとしたまちづくりを展開しており、観光資源として鬼を活用している。そこで、大江支所の協力を得て、大江山鬼瓦工房、日本の鬼の交流博物館、鬼獄稲荷神社等の鬼に関係する施設と、元伊勢内宮皇大神社、元伊勢外宮豊受大神社、元伊勢天岩戸神社、大江和紙伝承館等の直接鬼には関係しない施設の来場者数を比較したところ、鬼関連以外の観光地の方が施設利用者が多いという結果が得られた。このことから、人々に印象づける町のシンボルとして鬼をアピールするとともに、それ以外の観光資源の魅力発信が必要という結論を得た。

由良川と大江 ～防災の観点から見る現在について～

大江町と由良川の関係について、特に防災の観点から調査を行った。なぜ大江の地域は過去何度も由良川による水害に見舞われてきたのかを、由良川が暴れ川と呼ばれる所以について調べるとともに、過去の水害被害についても調査し、現在どのようにしてその由良川と大江地域は向き合っているのかについて調査を行った。本グループは遠隔受講だったため、現地調査を行うことができず、これらの点について、主に文献調査を中心に行った。様々な取り組みを積み重ね、地域住民とともに川づくりの意識を作り上げていくことで、現在の大江町と由良川の共存の形が形成されていることがわかった。

今年度は基本的にオンラインでの受講となっていたため地域の方たちはもちろん、同じクラスの学生と同じ空間で共同で活動することができませんでしたが、オンラインで同じように参加している学生と一緒に文献調査ができたことで本来のフィールドワークの集大成ともいえる資料作り(文献調査)の基礎が身につく、また次年度に向けた良い経験(感覚)を得ることができたと感じています。印象に残っていることとしては同じ教室で受けることができない学生同士で班を結成しZOOMを用いて共同で文献調査ができたことです。たとえば、大学に入学できなくてもオンラインで同じクラスの学生と作業をすることができる有難さをこの演習で感じました。次年度こそは地域に出向き、自分の目で確かめ、グループでコミュニケーションを取り、自分の言葉で研究の成果を発信することができるようにしたいです。

VOICE 松村 洸希
地域経営学科 1回生 京都府立加悦谷高等学校(京都府)出身

地域との協働実践を通してプロジェクトマネジメントを学ぶ



科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-D

担当者名 谷口 知弘・藤島 光雄

子どもから高齢者までの多世代交流の場を作る～公民館のふれあいコンサートを通じて

桃映地区公民館チームでは、本学が位置する桃映中学校区の桃映地域公民館でのフリーマーケット&ふれあいコンサートの活動に参画した。このイベントは、桃映地区の問題の一つである子どもから高齢者までが関わる機会が少ないことの解決や桃映地域公民館の利用者を増やすことなどを目的に行われた。イベント企画の段階からの参画を通じて、住民自治活動に触れると共に、問題解決の活動を提案し試みた。

活動の企画では、さまざまなアイデアを提案し、桃映地域公民館の方と話し合いを重ね「手形アート」に決定し、運営を行った。イベント参加者に声をかけ、手形を押ししてもらい、5色のカラフルな桔梗紋を製作した。

また、イベント当日は、コンサート会場の設営や音響機器の搬入から、閉会後の会場全体の片付けまで地域住民との共同作業に参加した。

この実践を通じて、地域社会や住民自治の基礎知識を学び、協働実践で地域に関わる姿勢を学んだ。

コロナ禍でつながりをつくる試み～大正地区公民館「つながる広報プロジェクト」への参画

大正地区公民館チームは、本学が位置する大正小学校区の大正地区公民館の広報委員会と協働し地域の問題解決を試みる実験的活動として「つながる広報プロジェクト」に参画した。

大正地区の新住民が地域への関心や住民と関わりを持ちにくいとの問題に注目し、SNSを活用して新住民のあらたな繋がりを生み出す試みを実践した。具体的には、大正地区のおもしろい人を選び、インタビューを行って動画とパンフレットを作成した。インタビューでは、地域の人といろいろな話をし、繋がりができたことは良い体験だった。今後、動画はSNS(Instagram)で発信し、パンフレットは各戸に配布する予定である。

活動を振り返って、大学生と地域の人が協力して何かを成し遂げることが可能だということを実感できた。また、作成物の質を向上するためには、地域住民と学生が交流を重ね信頼関係を形成することが重要であることを学んだ。

学生の気づき

地域の人と大学生が協力して何かを成し遂げること、お互いの案を共有してモノにしていくことが印象に残った。大学生の考えや、地域の人の考えが交わることで、案や考えに深みが出ると実感し、交流するにあたっての利点であると感じた。これが印象に残った点である。また、活動において、繰り返し、話を聞きに行ったり、修正を重ねたり、時間をかけて一つのを完成させることの重要性を学んだ。反省点としては、複数人が一つの活動を行うにあたっての、段取りや連携などの点がうまくいかず、全体的に後れを取ってしまったことである。自分のすべきことと今後しなければいけないことを全員が把握し、それを踏まえて活動できるよう次年度はその点を気を付けたい。

VOICE 上田 亜依
地域経営学科 1回生 岐阜県立斐太高等学校(岐阜県)出身

桃映地域公民館チームでは、学生企画で「手形アート」を行いました。前期はオンライン授業のみで話し合いもうまくいかないことが多々あり、後学期に入り対面授業になり、どんな目的でやるのか、どんな活動にするのかを話し合い、12月にイベントを行いました。福知山市の公民館の仕組みや公民館の在り方などの基礎知識を学び、また地域社会に対する姿勢を学びました。実際にフリーマーケット&ふれあいコンサートの活動に参画して、学生と地域の方と関わる良い機会になりました。桃映地区の方とお話したり、中学生のボランティアの方に手形アートを手伝ってもらったりと新しい交流が生まれました。一年間の地域経営演習Ⅰ・Ⅱの活動を通じて、コロナ禍でいかに人と人との関わりを作るの難しさや自分たちで企画・運営することの難しさに直面し、その中でも実際にフリーマーケット&ふれあいコンサートの活動を行ったという経験を活かし、次年度以降の地域経営演習に繋げていきたいです。

VOICE 久保 心楽
地域経営学科 1回生 育英高等学校(兵庫県)出身

廃校活用・ポリス&カレッジ・パーキングエリアから考える福知山フィールドワーク



科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-E

担当者名 鄭年皓・杉岡秀紀

大学生も地域資源～旧川合小だから出来ること～

皆さんは、廃校についてどのようにお考えだろうか。まず、廃校とは、学校の統廃合や閉校などの理由でその経営をやめること、廃止すること、また、そのような学校施設の跡地のことである。少子化によって就学人口が全国的に減少しており、公立小学校の廃校数は、毎年200校を超えている。全国の廃校になった学校の活用状況として、約7割が活用されているが、現在は活用されていないが、活用の用途が決まっている。しかし、残りの3割は活用されておらず、活用の用途も決まっていなかったり、活用

されておらず、取り壊し予定にある状況である。活用例としては、福祉施設、企業・法人の施設、社会体育施設、体験交流施設などであり、活用方法は様々である。活用の用途が決まらない理由は、地域等からの要望があがっていないことや建物の老朽化などのためである。福知山市内にも私たちの活動拠点である旧川合小学校を含む16の廃校がある。そこで、本報告では「大学生も地域資源～旧川合小だから出来ること～」と題し、旧川合小学校から出来る廃校の活用方法を提案する。

信号機がなくてもダイジョブ?～新しい横断歩道の渡り方～

「信号機のない横断歩道」と聞いて、どのようなものを思い浮かべるだろうか。見たことがある人は想像しやすいと思うし、見たことがない人でもイメージは出来るだろう。学生の中には、自分の地元では見かけたことがないが、大学に進学するにあたり、下宿先の近くで初めて見たという人もいた。しかし、その危険性については、実際に危ない目にあったことがある人やその現場を目撃した人でないとかかりづらいかも。最近では、日本各地の信号機の増加による維持費の増加を抑えるということで、信号機の数減らしという動きもあつた。しか

し、実際は信号機のない横断歩道で事故が起きているわけで、信号機のない横断歩道での事故をどう減らす、もしくは安全に横断するにはどうすればいいかといった議論がなされている。そこで本グループでは「信号機がなくてもダイジョブ?～新しい横断歩道の渡り方～」と題し、信号機のない横断歩道の現状、問題を挙げるとともにそれに対する解決策を提案した。
※ 第3回大学ゼミ対抗プロジェクト「ポリス&カレッジ in KYOTO 2020」(主催:京都府警察本部)特別賞受賞

六人部PAで新商品を開発してみた

私たちのグループは六人部パーキングエリア(PA)の売上を向上するという目標を達成するために、六人部PAと福知山公立大学の学生でコラボメニューの開発を行った。テーマは「六人部PAで新商品を開発してみた」と題し、私たちがコラボメニューとして開発した「福袋ラーメン」を提案した。具体的には、六人部PAやSA・PAと上り・下りの違い、

朝日エアポートの概要などの基本情報、六人部パーキングエリアの店長の話から得たものと実際に訪問しわかったこと、学生とのコラボメニューが開発された事例を踏まえ、「福袋ラーメン」の考案及び開発の道程とPOPの作成、今後の発展可能性と課題点などについて提案した。

学生の気づき

1番印象に残っていることは、京都府警が主催する大学ゼミ対抗プロジェクト「ポリス&カレッジ in KYOTO」です。今年の内容は「信号機のない横断歩道における事故防止対策」で、約半年間、4人チームで取り組みました。この取り組みで何よりも難しかったのは、チームとのコミュニケーションでした。新型コロナウイルスの関係もあり、チームのみならず対面でも話さず、主にスマートフォンでコミュニケーションをとっていました。そのせいか、なかなか案がまとまらないなどの苦労がありました。そんな中、何とかチームのみならず案をまとめて2週間に1回のゼミで発表しても、先生からの指摘が絶えず、チーム全員が頭を抱えました。しかし、その指摘がチームにとってはいいやりの火種となり、その後の話は最初よりも格段に濃厚なものになりました。目標は優秀賞をもらうことでしたが、今となってはチーム一丸となってこの取り組みを行えたことに満足しており、賞を得ることにこだわりはなくなりました。このように地域経営演習Ⅰ・Ⅱでは、チームとのコミュニケーションについて学ぶことができたと思います。

自分たちのグループは六人部PAとコラボメニューを考案することになったが後学期から本格的に活動を始めたためかなり限られた時間であったと感じる。しかしその時間の中でもそれぞれ役割を分担し店長とも連携を取り、ラーメンの考案及び販売、POPの作成まで漕ぎつけることができたのは良かったと感じる。実際に経営している人の生の声を聞くことができたり、メニューの考案というのは普段あまり経験できないことでありとても良い経験になったと感じる。反省点としては事前知識が足りず店長に任せる点が多かったということ、グループでの仕事を均等に振ることができておらず、かなり負担を負った人がいるという点である。

VOICE 伊藤 沙也伽
地域経営学科 1回生 京都成章高等学校(京都府)出身

VOICE 下道 司
地域経営学科 1回生 京都府立西舞鶴高等学校(京都府)出身

地域の福祉と交通の課題



科目名 地域経営演習Ⅰ・Ⅱ-F

担当者名 岡本 悦司・川島 典子

社会福祉協議会が直面している地域課題とその解決方法

福知山市社会福祉協議会と協働し、市が抱える地域課題をデータと現場のワーカーさんのお話の双方から把握して、地域福祉の視座から解決する方法を学習した。具体的には、高齢者の介護予防のために閉じこもり予防を行う「ふれあい・いきいきサロン」の活動を平野町で体験した(画像添付)。また、本所だけでなく大江支所も訪問し、旧市内とは異なる中山間地域特有の地域課題について学び、地域課題の解決方法について共に考え討論した。



北近畿と福知山の鉄道交通

北近畿4市を環状に結ぶJRとKTR(京都タンゴ鉄道)路線を北近畿環状線と名付け、一周乗車を開催した。また市内を走るJR福知山線とその活性化策について学習した。福知山線活性化プロジェクトの一環として、市内への新駅誘致をとりあげ、候補地の視察を行ったうえで新駅アイデアをレポートし、完成予想のジオラマ作成をグループで行った(作成中の写真)。完成したジオラマはメディアセンターで展示され(学生らによる除幕式写真)、両丹日日新聞でも報じられた。



学生の気づき

1年生での演習・ゼミは新型コロナウイルスの影響で遠隔での実施が多かったが、そんな中でも先生らができることを考え、演習をより良いものにしようとしてくれたのがとても印象に残っている。もともと、大学に入りたての頃は入学式も中止、大学へ行く機会が最初のガイダンスのみで、友達もまともにできていなかったわけで、大学の先生、学生と交流する機会はこの演習くらいしかなかったため、当時の自分にとってとても重要な時間であったと思う。担当の川島先生は、大学での学び方を教えてくれただけでなく、学生(特に一人暮らし)の不安を少しでもなくしようと、一人一人に気を配っていたのがとても印象に残っている。2年ではもっと深い学びができるものと期待している。

VOICE 小坂 晴
地域経営学科 1回生 新潟明訓高等学校(新潟県)出身

1人1プロジェクト リーダー制による 地域協働政策ゼミ



科目名 地域経営演習Ⅲ・Ⅳ

担当者名 杉岡 秀紀

地域経営演習Ⅲ・Ⅳ(杉岡ゼミ)では、「1人1プロジェクトリーダー制による地域協働政策ゼミ」をテーマに大きく文献輪読、PBL(Project Based Learning)の2本柱で活動した。まず文献輪読については、前学期に北村亘ほか『地方自治論』(有斐閣、2017)、後学期に樽見弘紀『新・公共経営論』(ミネルヴァ書房、2020)の2冊を半年かけて輪読し、毎週、全員で討論を行った。PBLについては、①高大社連携プロジェクト(大学コンソーシアム京都)、②高大社連携プロジェクト(京都中小企業家同友会)③5大学インゼミプロジェクト、④与謝野プロジェクト(与謝野町観光協会)、⑤福知山市若者まち

づくり未来ラボプロジェクト(福知山市)、⑥京都から発信する政策研究交流大会プロジェクト(大学コンソーシアム京都)、⑦全国大学まちづくり政策フォーラムプロジェクト(京田辺市)、の7つのプロジェクトに半年かけて関わり、「1プロジェクト1リーダー」をキーワードに理論と実践を架橋するPBLを行った。

病床機能報告 データウェアハウスを 用いた中丹医療圏における 地域医療構想分析



科目名 地域経営演習Ⅲ・Ⅳ

担当者名 岡本 悦司

約7500の一般病院より提出された病床機能報告5年間分データをピボットテーブルとして自在に操作できるように加工されたデータウェアハウス(添付画像)を使って、前半ではまず中丹医療圏(福知山、舞鶴、綾部)の病院データを分析し、後半では任意選択した医療圏の病院データを自ら分析し中丹医療圏と比較した。前期では、全員のグループワークで政策研究交流大会に論文をエントリーした。後期は個人ワークとして任意に選択した医療圏の病院医療をレポートにまとめた。

住民意識に基づく 地域づくり



科目名 地域経営演習Ⅲ・Ⅳ

担当者名 張 明軍

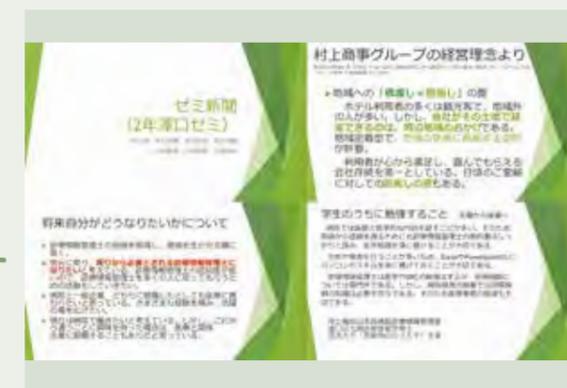
本研究は住民意識に焦点を与え、質的、量的調査を通じて、住民意識の実態、規定要因を解明し、地域づくり活動の推進に策を施し、課題解決に貢献することを目指す。インバウンド観光、多文化共生、地域資源の利活用、この三つの分野における理論学習、実地調査(国際交流協会、国土交通省福知山河川事務所)を通じて、住民意識の重要性、研究のあり方、今後の展開に必要な基礎知識を身に付けたと考えられる。

ング等を通じて、コロナ後のインバウンド観光に対する住民意識の解明、外国籍住民意識に基づく支援のあり方、住民意識に基づく地域資源の利活用の具体策への検討などが本研究室の課題であると考えられる。

写真は国土交通省福知山河川事務所、福知山市の担当者による河川工事現場の説明である。

今後、この三つの分野に関して、更に文献調査、現地調査、ヒアリ

保健・医療に関する 様々な社会問題を知り、 自らの社会的課題を見出す



科目名 地域経営演習Ⅲ・Ⅳ

担当者名 澤口 聡子

医学概論で学んだ保健・医療に関する様々な社会問題を背景とし、時事問題等から自ら見出した社会的課題を選択する。その社会的課題の、テーマと問題意識を自ら導く。なぜこのテーマを選び、なぜ重要であるのか、学術的、客観的に示す。テーマの重要性、既存の学術研究からみて重要な論点であり、なり得るかどうか、世の中の現実からしても意義深いかどうかを頭かにする。初期に学生たちが選択したテーマは、高齢者の社会福祉・視力の変容・事故後の精神的後遺症・うつ病・産後うつ・学生のうつとコロナのうつ・遠隔医療となる。同時に、論文の書き方を学び、SAS Statistical Analysis System(統計分析システム)の最新URLのyou tubeを聴く。

学生自身によるゼミ新聞が作成された。
本学、星准教授からの医療経営の講の後、来校された地元福知山の成功企業むらいちの村上裕子社長から、社訓・経営理念・経営方針を通じ、100回の現場を踏む中で、医療経営と一般経営に相違点よりも多くの共通点を見出すという講を聴く。学生達は、「むらいち」の丹波井や丹波栗を活かす経営に惹かれると共に、「大学の経営・医療経営の講義でわからなかったところが、今、わかりました」と感想を漏らした。



福知山市の企業数減少を食い止める —福知山から発信するオンライン事業承継塾—

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 井上 直樹

井上ゼミの地域経営演習Ⅰ・Ⅱは、①地方公会計の仕組みの理解、②財務情報および非財務情報の定量的・定性的分析手法の理解、③卒業論文作成の基本、という3つの要素から構成されています。

①については、教科書を毎回輪読し、担当箇所を発表することで、地方公会計を理解し、プレゼンテーション技術の修得を図っています。

②については、財務情報および非財務情報の定量的・定性的分析によって地域

の現状と課題を把握し、課題解決力の修得を図っています。今年度は、大学コンソーシアム京都が主催する「京都から発信する政策研究交流大会」出場に向けて、地域課題の分析、資料作成、プレゼンテーション等の演習を行いました。

具体的には、定量的なデータを分析し、福知山市では近年、創業比率が増加傾向にある一方、企業数は減少傾向にあるという課題を明らかにし、福知山市役所へのアドバイスを踏まえ、市内の企業数減少を食い止める政策提言を行いました。

学生の気づき

今年度のゼミでは①地方公会計と②京都から発信する政策研究交流大会(以下、政策大会)の大きく2つに取り組みました。地方公会計の学習では、担当した箇所の要点の整理、説明を行うことができました。他のゼミ生が担当した箇所についても理解を深めることができました。2年生までは企業会計を主に学習してきたので、公会計の現行制度や仕組み、成り立ちといった新しい側面での知識を得ることができました。

政策大会では、私が提示した案をゼミ生の中で選んでいただき、主体的にチームで行動することができました。

具体的には、ゼミ内での連絡の徹底や、パワーポイントの分担作成等が挙げられます。また、福知山市役所へのインタビューや大会入賞者の前例研究を行い、大会での提案の精度の向上を図ることもできました。

大学に入学してからは、資格試験の学習といった個人戦が多かったので、当大会ではチームで活動でき、非常に有意義なものになりました。

VOICE 旭 拓弥
地域経営学科 3年生 富山県立富山北部高等学校(富山県)出身

特に印象に残っていることは、府内の大学生が政策案を考え競う「京都から発信する政策研究交流大会」での作成活動です。私自身、コンテストに参加することが初めてで緊張をしていました。また、皆で一つの政策案を作成する楽しさや苦労を経験しました。コロナウイルスの影響により、対面とリモートを併用した活動で、慣れない事が多かったです。特に、対面とリモート間での考えや意見の共有が難しかったり、各個人の活動に対する温度差が違ったり、現地調査が実施できなかったりと様々な壁がありました。この壁を越えるために、皆が積極的に意見が言える雰囲気作りや授業時間外での取組みなどを全体で頑張りました。そして、互いが刺激し合いながらも、団結して政策案の作成活動を行い、活動を通して一人一人の責任と助け合いの大切さを改めて学びました。また、作成活動で周りに影響を受け本腰を入れるのではなく、自身が周りに影響を与えられるように行動できなかったことを反省し今後の課題だと思いました。

VOICE 細見 いるな
地域経営学科 3年生 兵庫県立氷上高等学校(兵庫県)出身

卒業研究に向けた諸活動 —教育問題を題材としたテーマ設定と資料収集および質問紙の作成—

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 江上 直樹

3年次のゼミナールでは、受講生各自の卒業研究に繋げるための諸活動を行った。具体的には、まず初めに、教育分野の専門紙や専門雑誌に記載されている記事を講読しながら自分の関心のある分野を模索し、研究テーマの設定を行った。その後、関連分野の先行研究を収集しながら、自身の研究課題についてより具体化をしていくと

ともに、研究方法を検討した。研究方法については、どの受講生においても量的データの収集が必要であることから、質問紙調査を実施することとし、質問紙の作成をそれぞれ行った。受講生によっては、本年度中に質問紙の配布まで行ったものもあるが、基本的には質問紙の配布・分析については4年次における課題としている。

学生の気づき

私は、大学生の食生活の現状から、食育のあり方について検討しようと考えています。今年度は、アンケートを作成するために、様々な論文を参考にしながら、大学生がこれまでと現在にどのような過ごし方をしているのかを尋ねる質問を考え、書き出していました。そこから、これまで受けてきた家庭科・食育の授業や、育ってきた家庭の環境など過去を尋ねるの質問項目と食生活などの大学生になった現在の過ごし方を答えていただく質問用紙を作成してきました。しかし、どの質問をピックアップするのか、選択肢をどのくらい細かく設定するのかなどをよく考えなければ、今のままだと必要な情報を十分に得られないと思うので、次年度は、何を知りたいのかをより明確にして、質問用紙を作成し、食育のあり方について検討していきたいと思っています。

3年生ゼミでは「子どもの居場所づくり」を研究テーマとして、主にアンケート調査を行いました。

初めに、学校や市が実施した子ども向けの質問を探してまとめていきました。現代の子どもたちに合わせたアンケート作りは、言葉遣いなどに苦戦しました。また、実際に学校にアンケート調査の実施をお願いする中で、しっかりとした準備が大事だなと感じました。

アンケートの内容は、主に高校生に向けて行いました。過去の遊んでいた居場所や部活動や習い事、家に居づらいう経験、居場所の知識について聞くことができました。現在は、アンケートの集計を行っています。このアンケートをもとに私は、「ふくちや子ども食堂」で活用していきたいと考えています。ふくちや子ども食堂で得たものを取材や広報を通じて全国に広まり、子どもの居場所のあり方についてもっと知識を深めたいです。

VOICE 一井 麻結華
地域経営学科 3年生 京都府立福知山高等学校(京都府)出身

VOICE 福島 幹人
地域経営学科 3年生 報徳学園高等学校(兵庫県)出身



| 行ラベル | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 |
|-----------------|------|------|------|------|------|------|------|
| 市立福知山市民病院 | 2696 | 3601 | 3765 | 3755 | 4358 | 4654 | 4667 |
| 01神経系疾患 | 168 | 174 | 149 | 198 | 209 | 233 | 243 |
| 02眼科系疾患 | 150 | 324 | 402 | 349 | 507 | 518 | 462 |
| 03耳鼻咽喉科系疾患 | 120 | 143 | 116 | 148 | 161 | 116 | 94 |
| 04呼吸器系疾患 | 373 | 539 | 404 | 417 | 502 | 592 | 566 |
| 05循環器系疾患 | 293 | 397 | 537 | 611 | 613 | 603 | 525 |
| 06消化器系疾患、肝臓・胆道 | 373 | 1058 | 1114 | 1115 | 1183 | 1221 | 1111 |
| 07筋骨格系疾患 | 48 | 65 | 68 | 32 | 54 | 78 | 27 |
| 08皮膚・皮下組織の疾患 | 27 | 43 | 53 | 43 | 68 | 38 | 50 |
| 09乳房の疾患 | 36 | 38 | 36 | 20 | 16 | 30 | 12 |
| 10内分泌・栄養・代謝に関する | 10 | | 14 | 27 | 31 | 23 | 41 |
| 11腎・泌尿器系疾患及び男性性 | 258 | 330 | 356 | 309 | 340 | 451 | 452 |
| 12女性生殖系疾患及び産科 | 68 | 119 | 165 | 127 | 149 | 236 | 190 |
| 13血液・造血系、免疫調節の | 91 | 109 | 117 | 108 | 117 | 115 | 131 |
| 14新生児疾患、先天性奇形 | 64 | 75 | 46 | 78 | 71 | 54 | 66 |
| 16外傷・熱傷・中毒 | 104 | 168 | 188 | 169 | 312 | 313 | 354 |
| 18その他 | 13 | 17 | | | 25 | 34 | 37 |

北近畿地域が抱える課題発見と解決への方策の検討 「福知山市における廃校問題の調査と提案」

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 大谷 杏

福知山を中心とした北近畿地域が抱える課題を調べ、そこから1つ選定し、解決へ向けた研究計画を立て、先行研究の調査、インタビューや現地調査などのフィールドワークをし、結果をひとつの論文にまとめ、発表するという一連の作業を全て学生主体で行った。本年度は「福知山市における廃校問題の調査と提案」というタイトルの

もと、廃校跡の現地調査、市役所資産活用課へのインタビュー調査、本学学生へのアンケート調査から、旧天津小学校の廃校後の校舎をリノベーションし学生住宅として活用することを提案した論文を作成し、12月に行われた大学コンソーシアム京都主催の京都から発信する政策研究交流大会で発表した。

学生の気づき

地域経営研究において印象に残っていることは「京都から発信する政策研究交流大会」の開催に向けて、活動したことです。前期はリモートであったため、思うように活動できませんでした。その中でも、できる準備から始めようと、Zoomを利用してメンバーと方向性を話し合いました。後期は対面で、現地調査も行いました。コロナ下であったため、インタビューは思うようにできませんでした。過去の事例をもとに、福知山における廃校活用について意見を出し合い、論文を完成することができました。

質疑応答に向けて他大学の研究内容を知り、質問を考え、また、どのような質問を受けるかを予想して対策を練ることで、より学びを深めることができました。次年度の卒業研究では一人で論文を完成させなければならず、計画的な活動が課題になってくるため、今年度の経験を活かしながら研究を深めていきたいです。

磯邊 文乃
地域経営学科 3回生 大分県立白杵高等学校(大分県)出身

今年度を通じて特に印象に残っているのは、「京都から発信する政策研究交流大会」に参加したこと。新型コロナウイルスの影響で対面での話し合いができなくなり、進捗が遅れることが危惧されましたが、ゼミの開催ごとに進行用・まとめ用スライドを作成したことや、Zoomのブレイクアウトルームの機能を活用したこと等により、発表に向けて着々と準備を進めることができました。対面に戻ってからも、Googleフォームを用いた調査票調査や、代表者による福知山市役所の資産活用課の方への聞き取り調査、少人数での廃校周辺での実地調査など、十分に配慮したうえで行動したことで、特に問題なく調査を進めることができました。反省すべき点としては、2つの問題を解決するための一挙両得なアイデアを考えるばかりに、個々の問題を深掘りできなかったこと、かつことが挙げられます。次年度の卒業研究を進めていく際には、より深い考察を持って臨みたいと考えています。

坂本 賢吾
地域経営学科 3回生 京都府立亀岡高等学校(京都府)出身

DPCデータを用いた 病院情報データウェアハウスの構築

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 岡本 悦司

2年生では専ら教員の作成したデータウェアハウスの使用方法をマスターしたが、3年生では自ら選択したデータをデータウェアハウスに加工する技術を習得した。今年度の受講者はDPC(診断群分類)と呼

ばれる入院費支払方法をとる病院データを自らデータウェアハウス化し、地域別、傷病別の入院データを病院単位で分析した。

学生の気づき

最も印象に残っている事は「京都から発信する政策研究交流大会」への参加です。限られた時間でしたが、2人で何とか見せられるまでのものには出来ました。しかし、実際に参加し、他参加者の発表を見、そしてその質疑応答で、その方々の内容の濃さと厚みを感じ、終了後に、もっとできることはあったのではないかと自分の力量不足を痛感しました。学びとなった事には、データの加工方法等が大きいのですが、その他にも予定外の事象への対応を考えておくべきだということもありました。最後の制作物において、予定外の動作不良等でギリギリになってからデータを変更せざるを得ない状況になったことがかなり悔やまれました。

次年度では、卒業制作に取り掛かることになるので、予想外のことに対応できるようにしっかりと予定を立てて始め、また、情報を集めて、内容を今年度制作したものの数倍は濃く厚みのあるものにと考えています。

鬼丸 日和
地域経営学科 3回生 誠修高等学校(福岡県)出身
栗野 志穂
地域経営学科 3回生 大分県立日田高等学校(大分県)出身

教員コメント

「2年生で魚を食わせ、3年生で魚のとり方を教え、4年生で板前にする」が、岡本ゼミのモットーです。魚はデータであり、魚はつったままでは食べられません。食べるためには、調理の技術が必要であり、データにあてはめるとそれは「データウェアハウス化」という技術であり、データウェアハウスとは「データのガラス細工」と形容されます。3年生ゼミでは、e-stat等で提供される膨大なExcelファイルをダウンロードし、クロス表をキューブ形式という形に加工する手法をマスターしました。「データのガラス細工」の表現に示されるように、セル一つ狂うだけでも全体がおかしくなる繊細な作業ですが、基本的な手技を十分マスターしてくれたと思っています。4年生では、選んだデータを加工してデータウェアハウス化し、さらにそこから新しい発見をする、という仕上げの段階にはいります。すぐれた板前になって、おいしい寿司を握ってくれることを期待します。

岡本 悦司
地域経営学部 学部長/教授



福知山市まちづくり活動応援事業 事業報告研修会にての発表風景

イル未来と2020での使用例

学内発表での使用例

キャリアパスを意識した能力開発 — 業界・企業分析レポート —

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 加藤 好雄

地域社会の再生、企業活動の活性化を目指して、実践的能力の活用ができる人材育成が北近畿地域において強く求められている。また近年、社会や企業が求める最も必要な能力として「複雑な課題解決能力」が挙げられるが、この能力に必要なものとして思考法や経営学・マーケティングの知識をベースとした課題解決の手法がある。さらに、その解決案は客

観的な根拠（データ）にもとづいていなければならない、そのために必要なのがデータ分析の知識・能力になる。
本授業では、業界・企業研究を通して基本的な業界・企業の分析手法を修得します。また、調査研究した内容をレポートと発表資料にまとめることで、データの視覚化、文章力、口頭表現等の能力・スキルを修得します。

学生の気づき

1年間のゼミを振り返ってみると、就職活動においての企業選びの考え方を養うことができたと感じる。また、ゼミの課題等を通して主に3つのことを学んだ。1つ目は、見やすい資料の作成方法である。資料で一番重視されるのは内容で、レイアウト等の見た目は個性であると思っていた。しかし、見た目にもこだわる資料は説得力や相手の理解度にも影響を与えると感じる。2つ目は、どのような場面でも根拠となるデータが必要であることである。何かを主張したいときには、データ=事実をセットすることが意識づけられた。3つ目は、常に問題意識をもって話を聞くことである。日常生活においても疑問点等が思い浮かぶようになり、問題意識を持つことがおもしろく感じるようになった。これらは、社会人になるにあたってとても意味のある学びであり、学生のうちに学ぶことができ良かった。

MBAの教科書を利用して、経営に関するさまざまな手法を学べたのが良かったと思います。特に自分が発表する章は理解していないと他の学生が理解できないので苦労しました。特に学びになったと思う点は、見やすい資料の作成でした。見やすい資料を作成することを心がけることによって、自分の考えや意見、データなどがわかりやすくなったと感じます。個人の活動なので、他の学生の進捗状態がわからないために、マイペース気味になってしまったのが反省点です。次年度は、期限内に自分の納得のいく資料や課題を提出したいと思います。

VOICE 辻 奈菜
地域経営学科 3年生 三重県立宇治山田高校(三重県)出身

VOICE 今村 温南
地域経営学科 3年生 前橋市立前橋高等学校(群馬県)出身

VRで広がる地域 — キャラクターブランディングと汎用3Dモデルの制作 —

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 神谷 達夫

今年度の地域経営研究では、主にバーチャルリアリティと呼ばれる分野周辺における技術や利用文化を地域に活かすことに取り組んだ。本テーマは、既に存在する地域の取り組みの場所をVRに移動・拡張することを目指しており、これまでの地域調査の延長線上にある取り組みとなっている。一昨年に神谷・江上ゼミで行った夜久野のデジタルアーカイブや、昨年の学生プロジェクトで行っていたIoT観光者行動分析などの取り組み内容を取り入れ、その発展のために使用することを念頭においてVRモデルを制作した。ただし、VRモデル及びその制作方法には汎用性があるので、他の分野にも展開可能である。





地方創生事業における ソーシャル情報ハブ機能の考察

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 亀井 省吾

10名の学生が所属する本ゼミでは、アーキテクチャ概念、組織間関係におけるネットワーク理論、そしてCSV概念などについて学習し、イノベーションとは何かについて、ソーシャルインパクトとの関係性から考察することを目的としています。前学期後半からは、西日本最大の道の駅を有する地域商社 株式会社丹後王国ブルワリー(京

丹後市)社の企業研究を実施してきました。学生は、先行研究から導出した仮説について、同社社長へのインタビュー、フィールドワークを通じて実証を試み、その結果を去る2020年12月26日にZoom開催された同大会 Work in Progress 部門にて発表しました。

学生の気づき

前期は、様々な業種の人たちの話聞いて就職活動の準備ができたと思います。経営者やデザイナー、新聞社の方など多様な業界に触れることで職業選びの幅が広がりました。また、経営学の基本の知識も身につけることができ、より経営学に興味を持ちました。遠隔授業で実家からの参加となりましたが、自分を見つめ直すいい期間になったように感じます。

後期は学会への発表が印象に残っています。最初は学会で発表するとは予想していませんでした。しかし、フィールドワークを通してゼミ生との仲が深まり、団結して研究を進めることができました。ゼミのみんなで成果をあげられたことが財産になりました。4年生からの卒業研究も協力しながら進めていくことができる気がします。また、学会発表を通して実践的に論文を作成したことにより、論文作成の大まかな流れも理解できました。3年生終了時点で卒業論文のテーマと構成ができている点も、他のゼミにはない強みだと思います。

4年生からは自分の研究と向き合う時間が増えますが、それぞれが納得のいく研究ができるように、ゼミ生に良い刺激を与えられる存在になっていきます。そして、後輩にとって良い指針となるように取り組んでいきます。

VOICE 青木 陽亮
地域経営学科 3年生 岐阜県立岐阜商業高等学校(岐阜県)出身

亀井ゼミでの活動として、最も印象に残っているのは、情報社会学会という公式な場で、メンバーと共に論文を発表したことだ。北近畿にある最大級の道の駅、「丹後王国ブルワリー」をフィールドとして、事例検証から発表までをメンバー同士一丸となり成し遂げた。

私は、主に丹後王国ブルワリー事業の核となる「クラフトビール」の分野について他二人のメンバーと共にまとめたが、クラフトビール事業が与える社会的影響について分析・考察することに最も苦労した。その理由が、クラフトビールを醸造し、販売するまでに様々な取り組みがあり、様々な分野との結びつきがあったため、どの事業がどのような社会的役割を成しているのか一つずつ考え、当てはめていく必要があったためだ。ただ、そうした考察をまとめ上げ、本番の発表を成し遂げた時の達成感、何物にも代えがたいものだと感じた。

発表までもに活動したメンバーと、支えてくださった亀井先生には感謝の意を伝えたい。

VOICE 村上 洋輝
地域経営学科 3年生 岡山県立笠岡高等学校(岡山県)出身

人口減少社会の課題を克服する福祉の学習

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 川島 典子

3年生を対象とした本演習では、来年度の卒業論文作成に向けて、社会福祉的な地域課題をテーマとし、各々の卒論を構築していけるよう理論と実践を融合させた演習を行った。具体的には、人口減少社会における地域経営を考える際、どのようにすれば合計特殊出生率が向上するのかを合計特殊出生率の高い京都府北部地方の市町を事例として考え、議論してい

る。更に、より一層深刻化する高齢化率向上に備え、独居高齢者の孤立化を予防する方策も考えた。また、ゼミ生が全員、公務員希望であったため、宮津市で開催された北近畿地域連携機構市民学習部主催「北近畿地域創生フューチャーセッション」にも参加した。参加した学生のうち1名は、グループの代表としてセッションの内容をまとめ、発表している(添付写真)。

学生の気づき

川島ゼミに所属させていただき、とても有意義な体験が出来た。特に印象に残っていることは、宮津市で開催された、「北近畿フューチャーセッション」に参加したことだ。このイベントでは、京大生や北近畿の公務員の方々と、地域活性化の課題について議論を交わした。議論の中で、多様な考え方を知り、自分の考えを深めることが出来たと感じている。

また、普段のゼミにおいても、地域福祉に関する文献を読み、輪読をすることは自分にとっての理解につながったので良かった。次年度の卒業研究に向けて、なるべく多くの関連文献を、春休みに読み、自身の研究テーマを固めておきたいと思う。

VOICE 清水 篤郎
地域経営学科 3年生 福井県立大野高等学校(福井県)出身

前期では先生の著書を輪読し、卒業論文の構成や書き方を学んだ。また、その著書を通して私自身も興味のある社会福祉について深く知ることができた。大きく社会福祉についても介護や、子育て、女性の活躍などさまざまな分野について幅広く学びを吸収した。特に印象に残っている活動は、後期に参加させていただいた「北近畿フューチャーセッション」である。宮津市の上宮津で活動されている方、奈良県の市役所で広報を担当されている方をゲストに迎え地域おこしのあり方、発信の方法など非常に楽しい場で貴重な経験をさせていただいた。グループワークでは大学生だけではなく、公務員の方、地域おこし協力隊の方などさまざまな肩書、年代のかたと意見交換をすることが出来た。最後に発表する場を頂けたことで多くの意見を自分の中で整理しながらアウトプットできる場となった。次年度では、高齢者福祉のあり方、制度、効果など地元の事例をもとに考察していきたい。

VOICE 下田 晴翔
地域経営学科 3年生 鳥取県立鳥取高等学校(鳥取県)出身



労働社会学と地域雇用政策の研究

科目名 地域経営研究 I・II

担当者名 倉田 良樹

労働社会学と地域雇用政策に関して、今年度は文献輪読を中心に演習を行った。扱ったテーマは、地方自治体による地域振興政策と地域雇用開発の事例研究、日本の外国人労働者問題、日本人の海外就労、リモートワークの実践と課題、などである。聞き取り調査を用いた質的研究の方法についても勉強して、卒業論文の執筆のための準備を行った。



観光地域づくりを巡る諸問題を考える

科目名 地域経営研究 I・II

担当者名 佐藤 充

本演習は、研究のデザインとプロセスを理解し、自らの問題意識に立脚した研究計画の策定とその実施が目的であった。一年を通して、各学生は、主に観光地域づくりに関する問題意識に基づいて、先行研究のサーベイや既往調査のデータの収集・分析を行った。また、個人研究とあわせて、2年生と合同で、海の京都観光圏に

おける課題をテーマにしたプロジェクトを2つ企画し、それぞれに取り組んだ。一つは、京丹後市・夕日ヶ浦エリアでの地域ブランディングプロジェクトで、閑散期の観光誘客に向けた取り組みを行った。もう一つは、伊根町のお土産づくりプロジェクトで、観光客向けのお土産のアイデアを生み出した。

学生の気づき

1年間ゼミに所属して、伊根町の現状や夕日ヶ浦のイベントなどに参加しコロナ禍の中でもあらゆる人と交流を行いました。今年は、前期ではオンライン上での講義になり、同じゼミ生とコミュニケーションを取りながら、様々な地域の観光に関することを中心に学んできました。後期では、フィールドワークを中心に2年生と合同で京丹後地域の観光のあり方を研究し、各グループに分かれて学びを深めました。私が所属したグループは、伊根町のグループで主に先輩から受け継いだ伊根のお土産づくりを意見を交わし、また、実際に伊根町に訪問しお話を聞き、伊根町の現状と課題を理解することができました。これからは来年度に向けて新しいお土産づくりを行いたいと考えています。また、先輩達の案であるお土産物を今後クラウドファンディングなどを使い、伊根町の魅力を創り出していきたいです。

ゼミで印象に残っていることは夕日ヶ浦で行われたキャンドルナイトのイベントに参加したこと。私は体験型コンテンツのSUP(スタンドアップパドルボード)というウォータースポーツの集客を図るために、実際に被験体となってSUP体験を行いました。ウェットスーツを着てサーフボードに乗るというプライベートでできないような貴重な体験を行えたり、海側からキャンドルナイトを見たりすることができ、イベントスタッフでありながらも自身もイベントを楽しむことができました。

この体験から地域ブランディングを考えていく上で、イベントから学ぶことがたくさんあると感じました。また、地域に大学生の若者目線の意見が取り入れられることでユニークなアイデアが発掘されるのではないかと感じました。今後の活動としては、夕日ヶ浦の持つ魅力・コンセプトの明確化を行った上で観光地域づくりを進めていく必要があると感じました。

VOICE 神本 雄大
地域経営学科 3年生 岡山県立林野高等学校(岡山県)出身

VOICE 山品 達哉
地域経営学科 3年生 福井県立武生東高等学校(福井県)出身

一対比較法 Paired Comparison Method

鄭ゼミ

担当: 鄭年皓(ジョン ニョンホ)



サードプレイスを中心とした Project Based Learning

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 杉岡 秀紀

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ(杉岡ゼミ)では、「サードプレイスを中心としたProject Based Learning」をテーマに大きく文献輪読、PBL(Project Based Learning)の2本柱で活動した。まず文献輪読については、前学期に石橋章市朗ほか『公共政策学』(ミネルヴァ書房、2018)、後学期にレイ・オルデンバーグ『サードプレイス』(みずす書房、2013)の2冊を通年かけて輪読し、毎週全員で討論を行った。

PBLについては、①サードプレイスプロジェクト朝来市、②高大社連携プロジェクトin豊岡市、③5大学インゼミプロジェクトin雲南市、④政策コンペプロジェクト@京都市・京田辺市、⑤商店街創生プロジェクト@舞鶴市、の5つのプロジェクトに通年かけて関わり、「1プロジェクト1リーダー」をキーワードに理論と実践を架橋するPBLを行った。

学生の気づき

今回、1人1プロジェクトの代表を務める、ということで私は朝来市のサードプレイス事業について昨年度より深く研究することができました。2回生の前期に杉岡ゼミに所属してから2年間朝来市にフィールドを置いて活動してきました。サードプレイス事業への参加や朝来市で行われる地域会議への参加を通して朝来市の方々と交流を深めることもできました。また研究するにあたってサードプレイスについての文献熟読をゼミ生としたり、事業関連でコンペに出場したりと、様々な活動と結びつけながら研究することができ、とても楽しかったです。他のプロジェクトでも近大付属高校の学生と豊岡の企業を訪問し地域広報誌に取り上げていただいたり、艦コレのイベントにスタッフとして参加したりととても充実した時間を過ごすことができました。卒業論文ではサードプレイスについて書きたいと考えています。

今年度の活動としては、コンペリーダーとして「京都から発信する政策交流研究大会」、「全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺(オンライン番外編)」に出場したことが印象に残っている。特に、京都から発信する政策交流研究大会においては、学生実行委員会に入り他大生と大会の学生企画を準備・実施する中で、価値観の異なる人との交流の中で企画することの大切さを学んだ。地域という1つのワードをとっても、私は地方や田舎をイメージするが、人によっては都道府県単位や学校区単位など、バラバラな考えを持っていることが分かった。様々な考えをしっかりとぶつけ合うことで、新しい価値観が見い出されより内容の深い学生企画を完成させることができた。今後の活動においても、同じような考えの人以外に、全く違う分野で生活されている人を取り込みたい。大会においては受賞はできなかったが、ゼミ生それぞれの思いが地方におけるサードプレイスの在り方について提言することができた。

VOICE 青木 英里奈
地域経営学科 3年生 静岡市立高等学校(静岡県)出身

VOICE 西田 光輝
地域経営学科 3年生 京都府立園部高等学校(京都府)出身

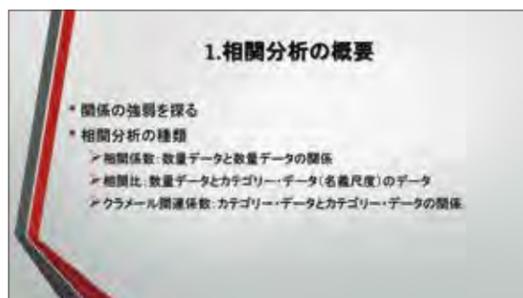
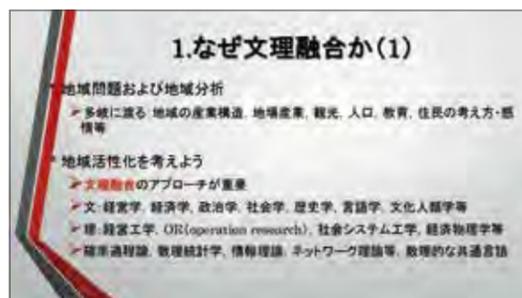
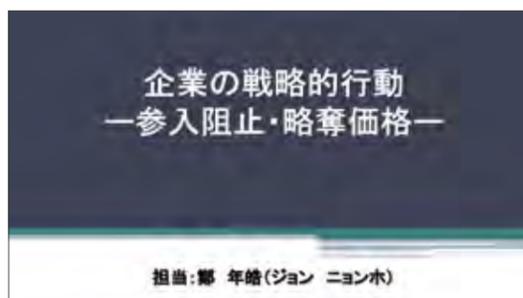
文理融合型経営学の演習

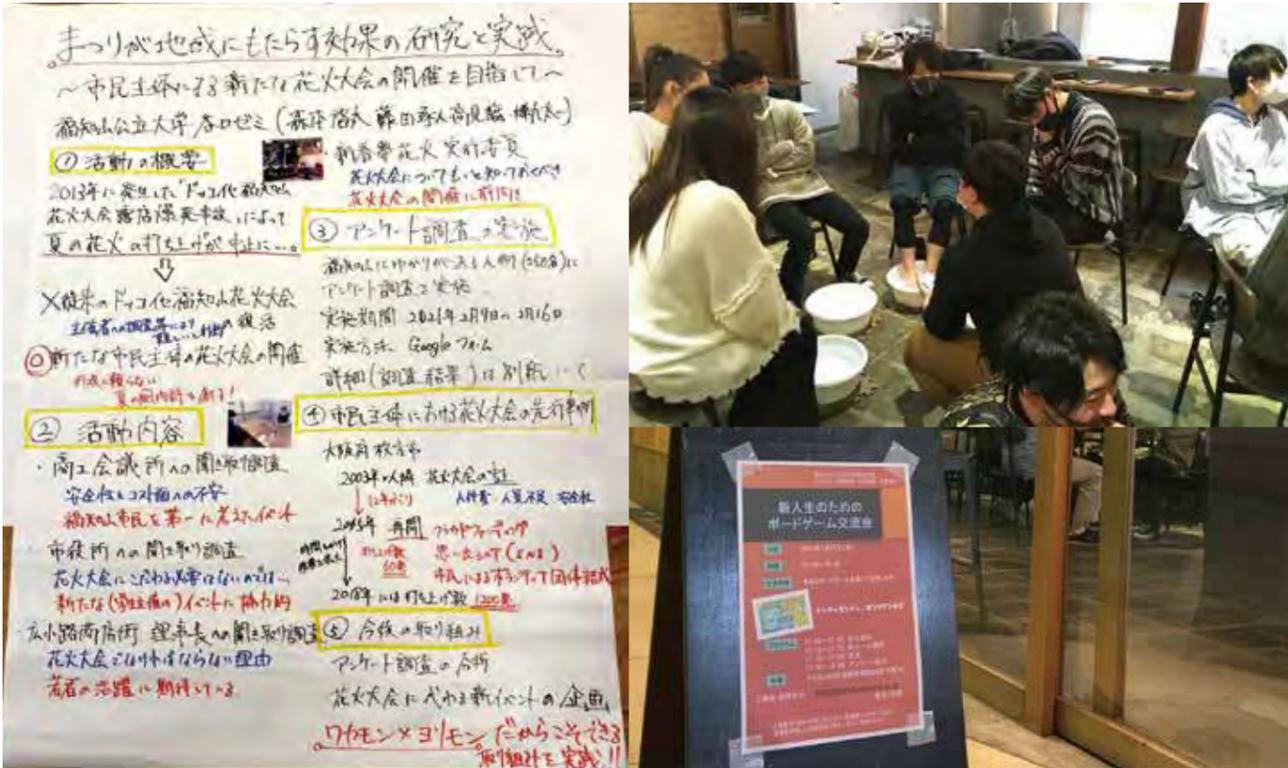
科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 鄭年皓

本演習では、経営学・経営科学の諸理論と分析アプローチに基づく「文理融合型経営学」を学習している。「地域経営研究Ⅰ」では、経営学の全般的な知識と、計量的な分析の基礎を学習する上で、「地域経営研究Ⅱ」では、「地域経営研究Ⅰ」の学習成果を踏まえて、経営

戦略・ビジネスモデルに関する専門書と論文を読むとともに、多変量解析を本格的に学ぶための前提知識を学習している。これにより、定性的な理論と定量的な方法論を兼ね備えた文理融合型演習を展開している。





地域社会の問題解決を試みる 地域協働プロジェクトの実践

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 谷口 知弘

本演習は、問題発見から解決に至る協働型デザインプロセスをチームで企画・運営することでファシリテーションやプロジェクトマネジメントの実践能力を身につけること目的として1年間活動した。10名のメンバーは、関心のテーマに集って3つのチームをつくり、福知山市の中心市街地をフィールドに次の3つのテーマで取り組んだ。コロナ禍、フィールドに出る実践は大きな制約を受けたが、聞き取り調査や事例調査を中心に、2つのチームは小さな実験的取り組みを行い、もう一つのチーム

はネットを活用した市民アンケートを実施した。
●まつりが地域にもたらす効果の研究と実践
～市民主体による新たな花火大会の開催を目指して
●福知山公立大学における大学生の居場所づくりについての実践研究
●コロナ禍における地域課題の解決に向けて
～ボードゲームを用いた新入生とまちを救う取り組み

学生の気づき

地域経営研究を振り返って最も印象に残っていることは、前期のオンラインによる活動です。初めてで慣れないオンラインでの活動に困惑する場面も多々ありましたが、オンラインだからその面白みや、地域に飛び込めない分のインターネットをフル活用した情報収集など、オンラインでできることを探りながらの活動はやりがいがありました。特に学びになったと思うことは、アンケート調査の有効性とそのアンケートが適切かどうか繰り返し検討することの重要性です。後期になって対面での活動が再開されると、前期にはできなかった「聞き取り調査」や「聞き取り調査をした上でのアンケート作成」を行うことができました。アンケートを作成する上では「答えにくい質問文になっていないか」や「質問によって不快に感じる人はいないか」などを考えることの大切さを学びました。来年度はアンケートの調査結果の分析を行い、それを根拠にしてより信憑性の高い成果報告ができるよう努めます。

VOICE 森本 啓太
地域経営学科 3年生 兵庫県立尼崎北高等学校(兵庫県)出身

今年度はコロナ禍の影響もあり、谷口ゼミならではのフィールドワークが難しい現状にあった。前期では、ZOOMを活用したオンラインでの授業がほとんどであったが、ブレイクアウトルームを活用して何度もミーティングを重ねることができた。また実際にオンラインでの社会実験を行って、その難しさを知り、経験することができた。後期では、対面が可能になり、やっとゼミに所属しているという実感が湧いた。内容としては、自分たちのやりたい事を明確にして、4年時までの見通しを立てた。また、1月には対面での社会実験も行なって、大きな収穫を得ることができた。この一年を振り返り、反省点は、あまり自分から積極的に意見を出さなかったところにある。オンラインが初めてだった事もあるかもしれないが、環境の変化についていけず苦痛した。話が伝わっているのかわかりづらさを感じることがあり、順応していかなければならないと痛感した。来年に向けては、より突っ込んだ内容での社会実験を行って最終的な目標に向けて進めていきたいと考えている。

VOICE 清水 俊太
地域経営学科 3年生 福井県立若狭高等学校(福井県)出身

多自然圏の活性化に関する研究

科目名 地域経営研究Ⅰ・Ⅱ

担当者名 中尾 誠二

当3回生ゼミでは、各自の進路に関連させた研究テーマを設定し、文献調査や聞き取り調査を行った。所属ゼミ生4人は全員が出身地(非大都市圏)等の自治体職員を目指しているため、当該地域の活性化に必要とされる施策を中心に、来年度の卒業研究テーマとしても継続し得る内容を選定した。具体的には以下の通り。

1. 齊藤広樹「日本農業の新規就農者定着の重要性」
2. 中島亨「条件不利地域の活性化と外部人材の関係性」
3. 山下優也「コロナ禍における地域創生案」
4. 吉国快斗「関係人口創出の重要性について」

学生の気づき

一年間のゼミ活動を通して一番印象に残っている事は大江町での体験である。コロナ禍という事もあって前期のゼミ活動はZoomを通じた講義が中心だったこともありゼミ活動らしいことが初めて出来たため印象に残っている。特に学びになった事としては地域を盛り上げようとする住民の方の考えを直接聞くことによって現在のどのような状況なのかを知ることが出来るという事とその地域の歴史に触れることが出来るという事の2点が挙げられる。反省点としては地域の方との交流の際にあまり積極的に発言することが出来なかったことと何を目的としていくかを明確に決めることが出来ていなかったことが挙げられる。次年度の課題としては6W2Hを意識した質問を投げることが出来るように経験を積んでいきたい。

VOICE 齊藤 広樹
地域経営学科 3年生 宮崎県立妻高等学校(宮崎県)出身

1年間を振り返ってみて、コロナウイルスによって前期は実習というものに行けなかったが、オンラインを通じて、色々な方々の話を聞く機会が多かった。それによって貴重な話というものが聞けると言う良い機会となった。それによって自分自身の問題意識というのがどんなことなのか少し見つけることができた。そして後期には実際に活動に行くことができ、その地域での魅力や課題というものを見ることや聞くことによって肌で実感し色々考えることができ良いものだった。そのようなことによってある程度、問題意識の分野絞ることができた。この一年ではまだ深く調べていくことが出来ていないため、次の年ではそういったことを深掘りしていくことをしていきたい。

VOICE 中島 亨
地域経営学科 3年生 鳥取県立鳥取城北高等学校(鳥取県)出身



災害時における自治体連携

科目名 地域経営研究 I・II

担当者名 藤島 光雄

日本は世界有数の自然災害大国といわれ、世界で起きるマグニチュード6を超える地震の20.8%が日本で発生している。一方で、首都直下地震や南海トラフ巨大地震が、今後30年以内に発生する確率は70~80%までになっている。その上、毎年のように日本各地で局地的な豪雨等による災害が発生しており、私たちの地元である福知

山市においても、平成25年、26年、29年、30年と、ここ数年の間で4度の水害に見舞われており、その対策が喫緊の課題となっている。ゼミでは、地元福知山市を取り上げ、自治体間連携・災害時相互応援協定という観点からみた災害対策について、提言を行った。

学生の気づき

ゼミで一番印象に残っていることは、京都から発信する政策研究交流大会に参加できたことです。政策大会に参加するのは、初めてでした。私たちのゼミでは、参加することを決めたのが遅く準備時間が短い中での出場となりました。短期間で発表資料を仕上げるのは、大変でしたが、日に日によくなっていくのを実感できて楽しく作業ができました。藤島先生やゼミ生とともに日程を調整して、対面形式とZOOMによるオンライン形式をうまく利用し発表資料を推敲しました。本番では、質疑応答にうまく答えられない場面があり、事前準備の不足、資料読み込みの甘さ、練習不足を実感しました。入賞という目標を達成することはできませんでした。悔しい思いをしましたが、今回参加できてよかったと思います。他大学の学生の発表や制作発表の準備過程や本番での発表から得られたものも多かったです。来年は、卒業論文制作があります。今回の反省を活かしたものにしたいと考えています。

VOICE 北村 洋翔
地域経営学科 3年生 滋賀県立八日市高等学校(滋賀県)出身

藤島ゼミでは主に地方行政について研究しました。前期では地元の自治体の概要や取り組みなどを調べ、スライドにまとめて発表するというを行いました。これにより、地元の魅力を再発見できたと同時に地方行政に関する知識や取り組みをより詳細に知ることができました。後期では災害時における自治体連携のあり方というテーマで政策コンペに参加しました。コンペでは分かりやすく伝えるプレゼンテーション能力や質問に正確に回答できる能力など、様々な面において他大学との差を痛感しました。次年度はこの悔しい経験を糧にして発表のスキルを高めていきたいです。また、発表資料の作成に当たってヒヤリング調査を行い、福知山市役所危機管理室の職員の方や治水記念館の方など様々な方々に協力していただきました。今回のようにゼミの研究に携わっていただいた方がいるからこそ学びを深めることができているということに感謝してこれからの卒業研究に取り組みたいと思います。

VOICE 森山 佳亮
地域経営学科 3年生 大分県立中津南高等学校(大分県)出身

地域における病院が抱える課題を経営の視点から検討 (名桜大学とのアカデミックな交流を通じて)

科目名 地域経営研究 I・II

担当者名 星 雅文

名桜大学は、本学と同様、診療情報管理士認定試験の指定公立大学である。このような大学は全国にわずか2校であり、当ゼミは、例年、同じ病院事務職養成を行う「同志」として、同大学国際経営学群診療情報管理専攻の上門・大城ゼミとの研究交流会を続けている。今年度、COVID-19の感染拡大により実施が危ぶまれたが、名桜大学のご厚意により2020年10月12~15日に沖縄研修を無事実施することができた。例年お世話になっている中部徳洲会病院における見学と研修は、直前のCOVID-19感染者増により急遽中止となったが、名桜大学との研究交流会は、予定通り開催に至った。研究交流会では、当ゼミ生と名桜大学3・4年生とのアイスブレイクを行った後、

大学混合で3グループを構成し、グループワークを行った。テーマは架空病院の事例から、現状の問題点、患者満足度調査票の問題点、および経営の改善に資する提案を行うものであった。学生は各グループで話し合った結果をまとめ、プレゼンテーションを行い、学群長を含む名桜大学教員からご指導・ご指摘を頂戴した。都市圏から離れている本学の学生にとって、他大学の、しかも同じ目標を持つ学生とチームを組み、病院医療やマネジメントを真剣に議論し提案をまとめる経験は、当ゼミの学生にとって将来への具体的なイメージ獲得と、資格取得のモチベーション向上につながったものとする。

学生の気づき

今年度のゼミで印象に残っていることは、10月に行った沖縄研修です。残念ながら例年のように現地の病院を見学させてもらうことはできませんでしたが、コロナの感染対策を行ったうえで、沖縄県の名桜大学の学生さんたちと交流会を行うことができました。その交流会で、先生から与えられた課題に取り組んだことは特に学びになったと思います。課題は架空の病院の経営について何が課題として挙げられているのか、その課題に対してどのような改善策を取ることができるかをグループで話し合い、発表するというものでした。この経験を通し、役割分担を決めたうえで仲間と協力し、問題解決を図ることの重要性を理解することができました。今年度の反省点は、自分から積極的に発言することが少なかったことです。そのため、次年度では自分の意見を積極的に発信していきたいです。また、卒業論文の作成にも計画的に取り組み、大学生生活の集大成としたいです。

VOICE 山下 真莉奈
医療福祉経営学科 3年生 京都府立西舞鶴高等学校(京都府)出身



事業承継税制に関する一考察

科目名 地域経営研究 I・II

担当者名 三好 ゆう

本演習では、事業承継税制の課題について考察した。「法人版」と「個人版」において納税額に差が出るケース、すなわち(1)保有する事業用資産に「個人版」の対象外となるものが含まれる場合、(2)農業の場合、あることが学習を通じて明らかとなった。「法人版」における親族内承継と親族外承継との中立性が保たれているのか、漁業権やロイヤルティ等の無形資産が主たる承継資産であるきわめて特殊

な事業活動を行う業種については現行制度でカバーできているのか、などといった鋭い論点が出され、専門的な知識に基づいて議論を深めることができた点を高く評価したい。今後は、「法人版」「個人版」ならびに親族内承継と親族外承継のそれぞれについて、具体的な事例を想定しながら、事業承継税制の問題点について解釈論にて考察していく予定である。

学生の気づき

今年度のゼミは、税に関する研究に先立ち税制の全体像を掴むため、それに関する著書のレジュメづくりから始まりました。しかし、これまで本をまともに読んでこなかった私がまともなレジュメを作成できるわけもなく、作ってはやり直しの日々が、前期の間しばらく続きました。そして後期に入ると研究のテーマ探しに移行しましたが、ここでは、税制に関する論文をひたすら読み自分が関心や問題意識が持てるものを探しました。そして私は研究分野を事業承継税制に決定しましたが、ここに至るまでにも活字慣れていない私は膨大な時間をかけてしまいました。その後は、事業承継税制における問題点を探す日々が続きましたが、ほぼ完成形といわれている事業承継税制において問題点を探することは、容易なことではありませんでした。最終的には考察段階ではあるものの事業承継税制における問題点をいくつか挙げるまでに至ることができたため、研究のための第一歩をやっと踏み出せたことを少し嬉しく思っています。

VOICE 村瀬 智也
地域経営学科 3年生 岐阜県立各務原西高等学校(岐阜県)出身

実データに基づく分析と検討

科目名 地域経営研究 I・II

担当者名 山田 篤

各自が設定したテーマについて、社会における実データをもとに分析と検討を行った。
設定したテーマは以下の通りである。
・ワンルーム賃貸の家賃は何に左右されるのか
・社会現象がおもちゃに与える影響

・誕生月が遅いことにより格差が生じるのか
・初老教育での英語教育における成果

学生の気づき

反省点は多いと考えている。まず、積極的な思考が出来ていなかったと思う。演習として出された課題には取り組んできたが、その1つ上の段階である自発的な活動には行けなかったと感じる。そういった行動が重要である。また、アカデミックな思考が足りていなかったと思う。論拠や参考文献に基づいた論理展開を意識していきたい。
前期演習では、教育分野における地域問題を学習させて頂いた。ここでは教育分野の構造を知った。12年の間教育を受けてきながら、その構造を知らなかったことを反省するとともに、知ることによって教育問題の何が問題なのかということが理解できるようになったと思う。後期演習では、コンセプトゼミということでモノのコンセプトについて考えた。多種多様な世界にあるコンセプトについてというのは、柔軟なモノの見方をする一助になったと思う。

VOICE 和多田 裕太
地域経営学科 3年生 福井県立美方高等学校(福井県)出身

2020年度「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」

2020年度に卒業する地域経営学部の学生より、4年生科目「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」の必修科目化により、全学生が、4年次に卒業研究に取り組み、卒業論文、卒業制作報告書、プロジェクト実施報告書を、大学における学びの最終成果物として執筆した。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行が、大学における教育・研究に大きな影響を及ぼす中、11月には「卒業研究中間報告会」をオンラインにより実施し、学生が自ら進めている研究内容について報告を行いながら、進捗を確認するなど、2月の提出に向けて、各自取り組んできた。

次ページからは、4年生がそれぞれ作成した成果物の研究テーマをまとめたものである。

卒業研究Ⅰ・Ⅱ 研究テーマ一覧

| 名前 | 指導教員名 | テーマ |
|-------|-------|--|
| 浅井ゆうみ | 井上直樹 | 小規模の組織農業経営体に適した管理会計手法 利益拡大を目的とした作業日報の導入 |
| 阿部将大 | 鄭年皓 | コンテンツ・ツーリズムによる地域観光の効果に関する研究 |
| 安東明日加 | 井上直樹 | 水道事業の民営化についての考察 |
| 池田つかさ | 中尾誠二 | SNSマーケティングの有効な活用～無印良品の事例を中心に～ |
| 石井與志崇 | 鄭年皓 | アパレル業界におけるディスプレイと売り上げの関係性に関する研究 |
| 石黒将太郎 | 佐藤充 | 再配達問題と新型コロナウイルス感染拡大による働き方の変化に関する考察 |
| 石橋優志 | 谷口知弘 | 祭りという伝統を絶やさないために大学生ができること～福知山が抱える花火大会復活に向けての問題・課題～ |
| 石原司 | 谷口知弘 | 人間関係の多様化がもたらす大学生生活の変化～人と人との交流に必要な要素とは何か～ |
| 板倉仁夢 | 塩見直紀 | 文房具と地方創生「地域資源と文房具」の掛け算による新しい切り口の魅力発信の可能性に関する研究 |
| 岩根拓海 | 江上直樹 | 遊びの教育的効果と運動習慣 |
| 岩畑俊哉 | 塩見直紀 | 日本のワーケーションの今後に関する考察～新型コロナウイルスとワーケーション～ |
| 上埜妙子 | 矢口芳生 | 地域ブランドの視点から見る”三和ぶどう”の現状と展望 |
| 上野裕也 | 中尾誠二 | 里山の魅力を活用した地域振興に関する考察～兵庫県川西市・黒川地区を中心に～ |
| 内田舞 | 佐藤充 | 観光地形成のプロセスとオーバーツーリズムへの対応-静岡県伊東市を事例にして- |
| 内堀郁海 | 佐藤充 | 地方温泉地における観光地域づくりの現状と課題～先進的な取り組みを事例にして～ |
| 扇谷友佳 | 中尾誠二 | コロナ禍におけるオンライン〇〇～オンラインサービスでの新しい価値提供～ |
| 大澤拓真 | 齋藤達弘 | 液状化リスクが地価に与える影響～名古屋市の事例～ |
| 大橋拓実 | 杉岡秀紀 | 中山間地農業における規制改革の成果と課題-兵庫県養父市を事例として- |
| 大福暉嵐 | 塩見直紀 | 私がつくる福知山マラソン～「私がつくる福知山マラソン」に学ぶ将来における福知山オンラインスポーツの可能性について～ |
| 岡野みゆき | 中尾誠二 | 新型コロナウイルス感染症禍におけるアドベンチャーツーリズムの実態把握に関する研究～滋賀県高島市を対象として～ |
| 岡本怜大 | 江上直樹 | メディア・リテラシーの教育的意義 |
| 奥西駿 | 齋藤達弘 | 日本の音楽産業におけるロングテール現象の検証 |
| 小椋真弥 | 井上直樹 | 有価証券報告書と財務諸表分析から読み取る日本特殊陶業株式会社の特徴と課題 |
| 小澤遼太郎 | 江上直樹 | 保護者の教育的側面の今後の進展についての考察～母親の運動意識や生活習慣が大学生と当時の運動意識や運動状況に与える影響～ |
| 小田恭兵 | 塩見直紀 | アイデアブック「問いかけから未来を考える問題集」 |
| 掛川翔矢 | 谷口知弘 | 商店街の空き店舗を活用した「シマチサイト(アート空間)」がもたらす地域社会への効果-SNSを用いた広報活動による地域交流への効果・課題～ |
| 河上惇太郎 | 中尾誠二 | 移住体験施設の現状と課題に関する考察～京都府中丹地域を事例として～ |
| 川口大熙 | 谷口知弘 | 商店街の空き店舗を活用した「シマチサイト(アート空間)」がもたらす地域社会への効果～地域におけるアート交流の場の可能性について～ |

| 名前 | 指導教員名 | テーマ |
|-------|-------|---|
| 河西麻椰 | 大谷杏 | K-POPは文化の浸透及び理解に貢献し得るか |
| 川端草太 | 江上直樹 | 障害学生支援の現状及び課題発見のインタビュー調査考察-福知山公立大学をモデルとして- |
| 木下瑞稀 | 江上直樹 | 宿題が与える教師・保護者への影響-2016年のアンケート調査と2020年のアンケート調査を比較して- |
| 黒木美佳 | 大谷杏 | ムスリム訪日外国人観光客の食に関する現状と課題-ムスリムを心地よくおもてなしするために- |
| 古賀琢己 | 三好ゆう | 市町村産業連関表からみる地方空港と地域経済の関係-長崎空港を事例に- |
| 後藤英智 | 杉岡秀紀 | ソフト・パワーをベースとした防災対策-福知山市の自主防災組織を事例として- |
| 小林冠太 | 塩見直紀 | 大人の島留学制度の未来と課題 島根県海士町を事例として |
| 小林達彦 | 鄭年皓 | 商店街の衰退要因に関する研究-他の商業形態との関係性に着目して- |
| 小林悠馬 | 齋藤達弘 | Jリーグクラブの収入と観客動員に関するパネル分析 |
| 小山結南 | 加藤好雄 | 経営形態別ホテル比較と宿泊特化型ホテルの考察-宿泊特化型ホテルの将来性- |
| 近藤亜紗 | 三好ゆう | 岐阜県養老町産業連関表(108部門)からみる地域産業構造の特徴 |
| 近藤天音 | 杉岡秀紀 | 富山県富山市のコンパクトなまちづくりにおける非集約エリアの現状と今後 |
| 近藤裕斗 | 谷口知弘 | 祭りという伝統を絶やさないために大学生ができること-福知山ドッコイセまつりと西条祭りを事例として- |
| 齊藤文哉 | 井上直樹 | 自治体の経常収支比率の調整方法についての考察-経常収支比率は低ければ低いほどいいのか- |
| 酒井陽平 | 加藤好雄 | ニッチ市場での優位性保持の要因の考察-特殊車両市場を例にして- |
| 酒生阿弥華 | 佐藤充 | 若年女性の飲酒動向と酒造メーカーのブランディング戦略 |
| 佐々木柊真 | 中尾誠二 | 「生活支援交通」の充実による高齢者の移動手段確保-京都府舞鶴市・山形県川西町・岩手県栗石町を事例に- |
| 佐藤彰仁 | 大谷杏 | 日本に居住する外国人が直面する異文化の差異-異文化理解を深めるには- |
| 篠原和真 | 矢口芳生 | 富山県における農業構造の現状と展望-小矢部市 下中第三集落を事例として- |
| 柴田葵衣 | 佐藤充 | 国内旅行における若者世代の旅行離れに関する現状と課題 |
| 清水まどか | 齋藤達弘 | 外食費の決定要因分析-都道府県別パネルデータによる分析- |
| 白岩朋夏 | 塩見直紀 | 地域資源から新しいアイデアを生み出す問題集が地域にもたらす可能性について-宮崎県高鍋町編の制作と100個の活用アイデアからの考察- |
| 新宮怜旺 | 中尾誠二 | ローカル線の経営母体差による「地域との密着性」の違いに関する考察 |
| 鈴木杏梨 | 張明軍 | 地方在住の在留外国人に向けての情報伝達に関する研究 |
| 鈴木健心 | 中尾誠二 | 日本におけるeスポーツ業界の現状整理とeスポーツによる地方振興の可能性 |
| 須藤優 | 加藤好雄 | 化粧品業界の広告宣伝費を中心としたプロモーション-資生堂とコーセーを事例として- |
| 高木寛斗 | 三好ゆう | 愛知県名古屋産産業連関表(107部門)の作成と課題 |
| 高木麻衣 | 佐藤充 | 地域住民の観光客受入に関する意向とその構成要素-京都府与謝野郡伊根町の事例から- |

| 名前 | 指導教員名 | テーマ |
|-------|-------|--|
| 高田悠太 | 江上直樹 | 子どもの自殺の現状と改善策の考察 |
| 高梨春花 | 井上直樹 | 統一的な基準における純資産変動計算書の項目-改訂モデルや株主資本等変動計算書との相違点- |
| 高原望乃 | 矢口芳生 | 由良オリーブ園を軸とした地域の活性化~人と人・人と地域・地域と地域という3つの視点からのアプローチ~ |
| 田口智也 | 谷口知弘 | 人間関係の多様性がもたらす大学生生活の姿の変化~大学生が関係人口となるプロセスの提案~ |
| 竹内就人 | 谷口知弘 | 人間関係の多様化がもたらす大学生生活の姿の変化~余暇の時間に福知山という街を意識する-大学生生活の満足度と都市部での娯楽~ |
| 竹林昇吾 | 江上直樹 | 今後必要になるスキルを中学校美術科教育においてどのように育成するか-アンケート結果をもとにICTを活用した主体的・対話的な教育提案- |
| 竹村朋佳 | 井上直樹 | 長野県信用組合による地域活性化の役割と生き残り戦略 |
| 田中孝児 | 張明軍 | フィンテックを用いた地域通貨による地方創生の可能性 |
| 田中奏 | 谷口知弘 | 人間関係の多様化がもたらす大学生生活の姿の変化-空き店舗元「純喫茶ばぶら」活用の実践と考察- |
| 谷川玲奈 | 佐藤充 | 口コミデータを用いた道の駅の評価に関する研究-富山県の道の駅を事例にして- |
| 谷口皓基 | 谷口知弘 | 祭りという伝統を絶やさないために大学生ができること-若者の減少や過疎化に対して、祭りがもつ可能性- |
| 玉井晶也 | 神谷達夫 | 地方におけるAIによる情報の分析と活用の検討 |
| 垂水友香 | 加藤好雄 | 縮小企業で求められる新たな需要-不動産市場を対象として- |
| 寺越裕貴 | 加藤好雄 | 成長期の電子部品業界と企業の投資効果についての考察-成長市場における経営戦略- |
| 土口茄穂 | 張明軍 | アートプロジェクトによる地域活性化-日中農村比較から- |
| 内藤和 | 塩見直紀 | 「やすぎ発見!AtoZ」の制作・活用から地元のこれからを考える |
| 中村緋佑 | 鄭年皓 | 日本企業におけるSNSを用いたマーケティング戦略 |
| 中本らいら | 加藤好雄 | 情報通信業界の地域性と地方への情報通信企業立地の有効性 |
| 夏田康成 | 中尾誠二 | 「地域福祉の主流化」における「介護・高齢者福祉」の現状の課題と将来展望~京都府福知山市での活用検討~ |
| 西川和杜 | 加藤好雄 | 銀行と同金融サービスである信用金庫の経営戦略 |
| 西澤七海 | 鄭年皓 | 新型宿泊業態が観光活性化に与える影響に関する研究-Airbnbの事例を中心に- |
| 西宮瑠美 | 杉岡秀紀 | コロナ禍におけるオンラインを活用した地方中小企業の採用活動のあり方-京都府北部地域を題材として- |
| 長谷川貴大 | 鄭年皓 | 人口過疎化と産業空洞化による企業経営の負の影響に関する研究 |
| 早川昂樹 | 井上直樹 | 書店経営の現状と課題 |
| 原口秀明 | 谷口知弘 | 祭りという伝統を絶やさないために大学生ができること-地域活性化のために地域の祭りを知ってもらうということ- |
| 原田凌河 | 江上直樹 | 幼児期の非認知能力を伸ばすための教育法-モンテッソーリ教育を例にして- |
| 針木大輔 | 谷口知弘 | 銭湯を核とした地域のエリア-zマネジメント-櫻湯を登録有形文化財にする- |
| 日高みのり | 大谷杏 | 外国人児童生徒に必要な支援とは何か?-愛知県の事例から- |

| 名前 | 指導教員名 | テーマ |
|-------|-------|---|
| 藤原尚輝 | 中尾誠二 | 宿坊による地域活性化の研究 一本山と地方を比較して |
| 古川七瀬 | 大谷杏 | 日本が難民を労働力として活用するために必要な支援は何か |
| 前田大輔 | 谷口知弘 | 商店街の空き店舗を活用した「シマチサイト(アート空間)」がもたらす地域社会への効果-アート交流やアートを日常的に触れることで生まれる「人やまち」の活性化- |
| 松井梨湖 | 加藤好雄 | 雇用の流動化による人材マッチング市場の成長-リクルートのHR事業を対象として- |
| 松尾賢治 | 加藤好雄 | 地方銀行の統合による地方銀行の存在価値についての考察-都市銀行・信用金庫との比較からみる地方銀行の必要性- |
| 松原悠人 | 谷口知弘 | 銭湯を核とした地域のエリアマネジメント~サウナ改装による需要の創出~ |
| 三樹颯斗 | 鄭年皓 | オンライン・レビューと消費者との関係についての研究 |
| 南出愛乃 | 渋谷節子 | 外国人労働者のためのよりよい労働環境づくりに向けて |
| 三村義貴 | 江上直樹 | 高等学校における校則の社会的意義と教育的効果~大学生を対象としたアンケート調査をもとに~ |
| 宮内瞭輔 | 鄭年皓 | 地域ブランド品におけるブランドと地域性の特性に関する研究-ブランド・マーケティングの視点から- |
| 村上大輔 | 谷口知弘 | 空き店舗を活用した「シマチサイト(アート空間)」がもたらす地域社会への効果-空き店舗から生まれる地域の拠り所とコミュニティの形成のための提案- |
| 目黒裕康 | 塩見直紀 | 金融小説-「金融×文学」でお金と向き合い、地方経済の再興へ- |
| 望月颯弥 | 塩見直紀 | キャッチコピーで地域活性化は可能かに関する考察 |
| 望月衛 | 塩見直紀 | 北近畿における持続可能なクライミングジム経営についての考察-経営コンセプトに着目して- |
| 森岡信照 | 中尾誠二 | 共助型の地域旅客運送サービスに関する研究-京都府福知山市を中心に- |
| 森田奈都美 | 谷口知弘 | 人間関係の多様化がもたらす大学生生活の姿の変化-「進学移住者」を活かした「廃校」の活用による地域活性化- |
| 八木一匡 | 渋谷節子 | 外国人労働者増加の背景と実態-課題解決に向けた考察- |
| 柳谷藍可 | 谷口知弘 | 人間関係の多様化がもたらす大学生生活の姿の変化-人間関係の変化による大学生生活の質の向上は誰にでも起こりうることを提案- |
| 山内優之介 | 江上直樹 | 小学校3~4年生の外国語活動実施から見える現状と課題-福知山市立小学校の教員を対象としたアンケート調査をもとに- |
| 山崎悦子 | 井上直樹 | 与謝野町の財政と分析 高齢者介護福祉関係の資金繰りについて考察 |
| 山元翔吾 | 塩見直紀 | 「地域の1歩目」を考えるローカルマインドセットAtoZ |
| 山本隆志 | 神谷達夫 | 地域活性化手段としてAIを活用する有効性-味夢の里-福知山市間の観光客移動の要因分析を実施して- |
| 吉朝優貴 | 塩見直紀 | コロナ禍の石見神楽を考える~3つのオンラインフォーラムから石見神楽の新たな形を探る~ |
| 渡辺瑞紀 | 大谷杏 | 同性婚は日本で認められるのか-他国の同性婚事例を参考に- |
| 谷口ますみ | 佐藤充 | 地方空港の民営化と地域活性化に関する研究-富士山静岡空港の取り組み事例から- |
| 芦田翔輝 | 星雅丈 | 筋力トレーニングは医療費の削減につながるか-その効率的かつ実現可能な方法に関する検討- |
| 五十嵐彩夏 | 岡本悦司 | 家庭内不慮の窒息死事故から考えられる窒息の危険因子については何か |
| 磯部貴久 | 星雅丈 | 兵庫県立淡路医療センターが淡路島の地域医療において担う役割は何か |
| 岩瀬綾花 | 岡本悦司 | SIDS-乳児死因におけるSIDSと「その他の全ての疾患」の関係性- |

| 名前 | 指導教員名 | テーマ |
|-------|-------|---|
| 岩原長流 | 星雅丈 | 医療機関における「非課税制度」は真に国民のための制度といえるか |
| 榎由真 | 岡本悦司 | 横浜市における妊産婦の自殺に関する実態調査-周産期メンタルヘルスの重要性と今後の課題 |
| 河村泰平 | 星雅丈 | 岐阜県東濃圏域において多治見市民病院が担う役割とは何か |
| 北村唯純 | 芦田信之 | 健康とダイエット-健康はバランスの良い食事から- |
| 小山菜苗 | 星雅丈 | 三田市・神戸市北区の医療機関の地域における「住み分け」とは |
| 山藤彩香 | 岡本悦司 | 家計調査から考える格差問題 |
| 塩崎万里奈 | 岡本悦司 | 日本のセルフメディケーションの在り方 |
| 芝田怜奈 | 佐藤恵 | 高齢者の服薬行動に関する研究 |
| 高橋 聡騎 | 星雅丈 | 兵庫県姫路市における医療機関の機能分化と将来構想は適切か |
| 津久井陽世 | 芦田信之 | 健康寿命を延ばすための日常生活の運動習慣 |
| 豊田友輔 | 芦田信之 | 健康かつ筋肉質を目指す生活-健康管理を徹底する- |
| 中川滯菜 | 星雅丈 | 愛知県西三河南部西医療圏における医療機関は機能分化を実現できているか |
| 西垣育人 | 星雅丈 | 京都・乙訓医療圏における京都桂病院の位置づけと強みは何か |
| 橋爪朋美 | 佐藤恵 | 高齢者の通院行動に関する研究 |
| 疋田実鈴 | 芦田信之 | セルフメディケーション~医療の課題と自己管理~ |
| 福井ひより | 岡本悦司 | 医療費の都道府県格差の要因-都道府県別市町村国民健康保険加入者の医療費を用いて- |
| 藤井大誠 | 星雅丈 | 兵庫県下においてリハビリテーション医療のリソースは充足しているか |
| 藤枝一樹 | 星雅丈 | 茨城県9つの二次医療圏の分析に基づく地域医療の研究 |
| 船田朱寧 | 星雅丈 | 熊本市における公的病院・大学病院・民間病院の果たす機能の違いは何か |
| 本間陽子 | 佐藤恵 | 健康と運動意識に観測された地域差 |
| 脇本萌果 | 星雅丈 | 南加賀医療圏の地域医療において公的病院・民間病院が果たす役割の違いは何か~加賀市医療センターを中心として~ |
| 山本元樹 | 芦田信之 | 治験プロセスの成り立ち~人体実験から治験へ~ |
| 井口佳奈 | 谷口知弘 | 銭湯を核とした地域のエリアマネジメント~赤字続きだった銭湯を黒字化させ持続可能なものにするために~ |
| 石橋真紀 | 杉岡秀紀 | CSR活動と無形資産価値の連動に関する研究-京都府における中小企業の事例を中心に- |
| 柏倉悠人 | 杉岡秀紀 | NPO法人における人材確保問題の現状と課題~京都府北部5市2町の事例研究~ |
| 亀谷隼生 | 中尾誠二 | 独立リーグ発展のために目指すべき道~独立リーグの現状と改善案~ |
| 黒熊航平 | 杉岡秀紀 | 市町村合併が与えた地域ブランド戦略への影響-大分県佐伯市における市町村合併と一村一品運動を事例として- |
| 多川隼 | 杉岡秀紀 | 地方選挙における高齢者層の投票行動についての研究-福知山市長選挙と市議会議員選挙を事例として- |
| 藤原尚大 | 杉岡秀紀 | 中山間地域におけるコミュニティナースの可能性と課題-京都府綾部市を事例に- |

2020年度 地域協働型教育成果報告会

2021年2月20日(土)、地域経営学部による2020年度地域協働型教育成果報告会を開催し、学生が一年間の学びの成果を発表しました。

1年生はグループごとに15分の口頭発表を行いました。「福知山市夜久野町における地域カルテ作成のためのデータ整理および図案の提案」を発表したグループは、地域課題の取り組みには地域の現状把握が不可欠であるとして、国勢調査やJSTAT MAP、Google Mapsの情報を活用して統計データを整理し、地域カルテの作成に向けた原案を提案しました。「万願寺甘とうとの挑戦～今までとこれから～」を発表したグループは、「農業＝生産」の固定概念を再定義するためには「擬人」と「萌え化」が有効な要素であるとして、農業における若者へのアプローチ方法を提案しました。その他、交通や空き家問題、廃校の跡地利用、防災、観光、多世代交流、パーキングエリアの新商品開発、社会福祉協議会が直面する地域課題と解決方法など、北近畿地域を主なフィールドとした取り組みは多岐にわたりました。

発表後は異なるクラスからの代表質問やオンラインで参加いただいた地域の方々との意見交換により、更に理解を深めました。発表した学生は「地域での取り組みを通じて、自分たちの声が地域に届くことを実感した」との感想を述べていました。2・3年生はポスターセッションにより活動成果を発表し、上級生の発表を熱心に聞く1年生の姿が印象的でした。



1年生「地域経営演習」の発表スケジュール

| | 101講義室 | 102講義室 | 103講義室 | ポスター発表 |
|-------|---|---|--|------------------------------|
| | 司会:杉岡秀紀 | 司会:谷口知弘 | 司会:江上直樹 | |
| 10:30 | 挨拶等 | 挨拶等 | 挨拶等 | |
| 10:35 | Aクラス①(中尾・亀井) 「万願寺甘とうとの挑戦 ～今までとこれから～」 | Cクラス②(山田・倉田) 「大江町のターン・リターンはどうすれば増えるか」 | Aクラス④(中尾・亀井) 「農業の未知なる可能性の探索 ～三和地域～」 | |
| 11:00 | Bクラス①(神谷・江上) 「福知山市夜久野町における地域カルテ作成のためのデータ整理および図案の提案」 | Aクラス③(中尾・亀井) 「福知山の交通 ～三和地域を中心に～」 | | |
| 11:25 | Cクラス①(山田・倉田) 「大江町における空き家問題」 | Dクラス②(谷口・藤島) 「コロナ禍でつながりをつくる試み～大正地区公民館「つながる広報プロジェクト」への参画」 | Eクラス③(鄭・杉岡) 「六人部PAで新商品を開発してみた」 | |
| 11:50 | 昼休憩 | | | |
| 12:50 | ポスターセッション(3階セミナー室・4階会議室へ) | | | |
| 13:50 | 後半挨拶・準備 | 後半挨拶・準備 | 後半挨拶・準備 | ポスターセッション 12:50～ 14:00 |
| 14:00 | Dクラス①(谷口・藤島) 「子どもから高齢者までの多世代交流の場を作る～公民館のふれあいコンサートを通じて」 | Bクラス②(神谷・江上) 「福知山市夜久野町における地域カルテ作成のためのデータ整理および図案の提案」 | Cクラス④(山田・倉田)「由良川と大江～防災の観点から見る現在について～」遠隔 | |
| 14:25 | Eクラス①(鄭・杉岡) 「大学生も地域資源～旧川合小だから出来ること～」 | Cクラス③(山田・倉田) 「大江町の観光と鬼伝説」 | Bクラス③(神谷・江上) 「福知山市夜久野町における地域カルテ作成のためのデータ整理および図案の提案」 | |
| 14:50 | Fクラス①(岡本・川島) 「社会福祉協議会が直面している地域課題とその解決方法」 「北近畿と福知山の鉄道交通」 | Eクラス②(鄭・杉岡) 「信号機がなくてもダイジョブ?～新しい横断歩道の渡り方～」 | Aクラス⑤(中尾・亀井) 「三和学園について」 | |
| 15:15 | Aクラス②(中尾・亀井) 「まるごと資源～大原神社とまちをつくる資源たち～」 | 待機(101とZoom接続) | 待機(101とZoom接続) | |
| 15:40 | 待機 | | | |
| 15:45 | 全体講評 | | | |
| 15:55 | 終了 | | | |

2、3年生ゼミ発表一覧

| 担当教員 | テーマ | 教室 | 担当教員 | テーマ | 教室 | | |
|----------------|--|-----|---|--|--|----|--------------------------------------|
| 井上 | ・福知山市の企業数減少を食い止める-福知山から発信するオンライン事業継承塾- | 309 | 三好 | ・産業連関表から見る飛騨市の地域産業の特徴 ・事業承継税制に関する一考察 | 305 | | |
| 亀井 | ・GUNZE企業研究:創業期 | | 304 | 加藤 | ・業界・企業研究-IT業界- ・不動産業界でこれから注目されるビジネスとは? ・銀行業界調査 | | |
| | ・GUNZE企業研究:アパレル期 | | | | 303 | 杉岡 | ・1人1プロジェクトリーダー制による地域協働政策ゼミ |
| | ・GUNZE企業研究:現代期 | | | | | | ・サードプレイスを中心としたProject Based Learning |
| ・GUNZE企業研究:未来期 | ・地域創生事業におけるソーシャル情報ハブ機能の考察 | 308 | 大谷 | ・北近畿を知る ・福知山市における廃校問題の調査と提案 | 302 | | |
| 倉田 | ・倉田ゼミ私の研究課題 | 304 | 江上 | ・卒業研究に向けた各自の取り組みについて ・北近畿に特化した企業カタログ製作 ・探求学習について～プレゼンテーション編～ ・遠隔学習支援の実施について | | | |
| 渋谷 | ・世界の多様な文化を学ぼう-異文化理解について考える- ・多様性のある世界を目指して-異文化理解について考える- | | 306 | 佐藤充 | ・伊根町のお土産物づくりプロジェクト ・地域ブランディングプロジェクト | | |
| 鄭 | ・鄭ゼミの研究内容 | 301 | | 張 | ・住民意識に基づく地域づくり | | |
| 谷口 | ・無くなりつつある地域資源の 保全と後世に残すための調査・研究 ・ママと女子大学生を繋ぐ架け橋プロジェクト～女子大学生の日常に寄り添うアカウントの運営～ ・コロナ禍における地域課題の解決に向けて～ボードゲームを用いた新入生とまちを教う取り組み～ ・福知山公立大学における大学生の居場所づくりについての実践研究 | | 305 | 岡本 | ・病床機能報告データウェアハウスを活用して医療圏の病院データを分析する ・データウェアハウス(DWH) | | |
| 中尾 | ・「大原」 ・日本農業の新規就農者定着の重要性 ・条件不利地域の活性化と外部人材の関係性 ・コロナ禍における地域創生案 ・関係人口創出の重要性について | 305 | | 川島 | ・社会福祉系ゼミ | | |
| 藤島 | ・「キャンプ」による福知山市の活性化 ・災害時における自治体間連携 | | 4F会議室 | 澤口 | ・2年ゼミ新聞 ・3年ゼミ新聞 | | |
| 山田 | ・神戸あかさたな ・篠山市の観光スポット、イベント紹介 ・福知山のおすすめ飲食店 ・代表的な日本料理・食べ物の説明 ・福知山観光AtoZ ・京都河原町・木屋町付近のおすすめのカフェを提案する対話システム ・北近畿の特産品 ・ワンルーム賃貸の家賃は何に左右されるのか? ・社会現象がおもちゃに与える影響 ・誕生月が遅いことにより格差が生じるのか ・初等教育での英語教育についての成果 | 305 | | 佐藤恵 | ・合計特殊出生率に関係する要因 ・社会福祉に関する活動報告-福知山市における地域福祉に着目して- ・紹介状なしで病院に行ったらいいいナンボ払わんの? ・北近畿地域において医療・介護資源は足りているか?北近畿類似地域との比較分析 | | |
| | 星 | | ・地域でのドローン活用に向けたマニュアル作成 ・福知山デジタルミュージアム ・ARアプリケーションの製作に向けて ・VRで広がる地域 | 神谷 | ・グローカル特別講義(社会調査演習)「2020年度学生生活実態調査」 | | |
| 社会調査 | | | 神谷 | | | | |

学生プロジェクト



学生が手掛けるプロジェクトは数多く存在し、
地域と連動したプロジェクトが多いのも魅力です。

学生プロジェクトとは、北近畿地域を中心とした学生の自主的活動について、その企画案を学内で公募し、審査・選定した上で、活動に必要な予算を助成する本学の制度です。

学生が地域の様々な関係者と連携しながら、実際の活動を通して地域課題に目を向け、学びを深めることを目的としています。2020年度では合計5件を採択しました。



プロジェクト名
「獣害対策ドローン開発のための基礎実験」

自分たちで組み立てたドローンを活用し、
地域課題の一つである

獣害対策に役立てる！

取り組まれている学生プロジェクトの概要は？

現在、福知山市産業観光課、福知山市内の地元企業、本学により「制御テクニカルプラットフォーム事業」が取り組まれています。同事業の中でドローンを用いた獣害対策が検討されており、その基礎実験に寄与できればとの思いから、もともとドローンに興味のあった私を中心にプロジェクトを立ち上げました。

メンバーについて教えてください。

私を含む地域経営学部の学生と、2020年度よりスタートした本学情報学部の学生の全5名で活動しています。最終的にはドローンを自動制御させる予定なので、プログラミングの知識をもった情報学部の学生に参加してもらえたのは心強いです。

現在の進捗状況は？

コロナ禍ということもあり、思うように活動できなかった側面はありますが、小型ドローンの試作機を複数台作り、その評価を行いました。また、ドローンが動物にどのような影響を与えるかを調べるため、福知山動物園にご協力いただき、現地での実験にも取り組みました。

具体的な実験の中身は？

手に持ったドローンや飛行させたドローンを動物に近づけ、反応を確認しました。ヤギやサル、イノシシなど様々な動物で実験しましたが、ターゲットとしていたシカで試したところ、ドローンに怯えて逃げるなど大きな反応を示してくれたのが収穫です。今後、休園日を利用して実験をしても良いと動物園のスタッフの方からご協力の声もいただけたので、継続的に取り組みたいと考えています。

今後の抱負をお願いします。

新型コロナウイルスの状況にもよりますが、メンバーとのミーティングなども徐々に増やして、プロジェクトをこれまで以上に積極的に取り組んでいきたいですね。最終的には実際に獣害のある地域に完成したシステムを設置し、地域の方々のお役に立てればと思います。

地域経営学科2年
箕崎 旦浩さん
京都府立西舞鶴高等学校出身



学生プロジェクト概要

Project.01 lot観光者行動分析 福知山市観光ブランディング事業



目的

昨年度の取り組みから派生し、新型コロナウイルス流行の中で加速的に可能性の広がったバーチャルリアリティ関連の分野に重きを置いて地域のIPについて検討した。現地に行く観光が難しい今だからこそ、距離の制約のないブランディングを目指した。

内容

リモートでの様々な取り組みが発達し、導入容易になった技術を地域で活かす形を模索した。福知山市のキャラクターであるドッコちゃんから派生したドッコちゃん2.0をイラスト・3Dモデルを作成しイベント出店や動画制作などを行った。取り組みは好評を集め、様々な応用が期待できる。また、地域のブランディングにおけるキャラクター制作に焦点を当てたガイドラインの制作等も行った。

Project.02 子どもの居場所調査

目的

近年、貧困問題、虐待、いじめなど様々な問題を抱え、自宅・学校以外の「第3の居場所※」が必要な子どもが増えている。この現状を解決するために、街中の駄菓子屋などを利用して、子どもと年齢の近い大学生が、子どもの居場所を作ることはできないかと考えた。そこで、子どもたちがどのような場所に集まるのかを知る必要があると考え、子どもの「第3の居場所」の現状を調査するために、本プロジェクトを立ち上げた。

内容

調査場所を福知山市にする。各中学校区から無作為で小学校1校を選び、アンケート調査を実施する。アンケートでは、普段遊んでいる場所、どのような場所で遊びたいか、遊ばせたいかなどを小学生とその保護者に質問する。アンケート調査に加えて、子ども向けや家族向けのイベントなどにボランティアで参加し、ブース出展を行うなどの協力活動を通じて聞き取り調査などを行う。以上の調査から、子どもと保護者の、学校以外の「第3の居場所」に対する考えを把握する。そして、今後我々が地域の駄菓子屋のような子どもたちの居場所を作る際の、場所の選定や事業内容の検討に本調査の結果を利用する。



Project.03 獣害対策用ドローン開発のための基礎実験



目的

福知山市周辺は獣害による農業への被害が大きく、獣害対策が必要とされている。福知山市産業観光課と福知山公立大学、福知山市地元企業との共同の取り組みである、制御テクニカルプラットフォーム事業では、新しいタイプの獣害対策として、いわゆるドローン(クワッドローター型の小型航空機)を用いた方法を検討している。本プロジェクトでは、この獣害対策ドローンの基礎実験に対して協力し、その成果を福知山市民に公表することを目的としている。

内容

リモートでの様々な取り組みが発達し、導入容易になった技術を地域で活かす形を模索した。福知山市のキャラクターであるドッコちゃんから派生したドッコちゃん2.0をイラスト・3Dモデルを作成しイベント出店や動画制作などを行った。取り組みは好評を集め、様々な応用が期待できる。また、地域のブランディングにおけるキャラクター制作に焦点を当てたガイドラインの制作等も行った。

Project.04 福知山イル未来と2020プロジェクションマッピング



目的

「福知山イル未来」とは、夜の観光を促進するコンテンツとして2018年から実施されているプロジェクションマッピングイベントである。本プロジェクトは、福知山イル未来と2020への参加を通じ、大学と外部団体との連携を創出及び強化することや、地域活動に活かせる力(地域協働、創造力、プログラミング等のスキル)を養い、今後の事業へ繋げることを目的としている。

内容

福知山イル未来と2020にて、光秀ミュージアム付近に大学生ブースを設け、展示を行った。大学生ブースでは、福知山まちづくり株式会社と協働し竹灯籠・和紙灯籠をコンピュータ制御LEDにより点灯させたほか、桜の木や地面へのプロジェクションマッピング、植垣のイルミネーションなどを行った。福桔祭では、京都トヨタ本社よりプリウスPHVをお借りし、展示を行った。イル未来との大学生ブースで特に人気の展示であった「ドッコちゃんVer2.0」が車に乗った演出を再現した。12月末には、「Fukuchiyama Xmas Vision」と題し、大学の校舎にクリスマスを題材とした映像を投影した。投影時の様子は、YouTubeLiveで配信した。

Project.05 学生プロジェクト2020「子ども食堂」



目的

このプロジェクトの目的は「大学生と子どもと一緒に出来る、楽しく温かい空間」をコンセプトにし、その空間の中で「食事、学び、遊び」を通じて子どもと交流を深めていくことです。子どもたちと大学生と一緒に楽しめる空間というものほどどちらにとっても新鮮であり、子どもたちにとってその空間が家や学校とはまた別に楽しめる、安心できるサードプレイスのような場所を目指しています。

内容

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により例年のような活動はできなかったものの、別の交流の仕方を考えたり、一回一回の開催を今まで以上に大切に、充実したものになるようにしました。今年度前期は食堂自体の開催はできなかったものの、子どもたちに手紙を書き、お菓子と一緒に各家庭を回りました。後期になると、通常開催が出来るようになり感染症対策を徹底しながら充実した開催を目指しました。特にアイスやプレゼントを用意し盛大に行ったクリスマスのイベントは子どもたちからも大きな反響を貰いました。このように今年度は活動が制限されながらも、安全に楽しい食堂を開催できる形を見つけられました。



福知山公立大学

「地域キャリア実習」プログラムについて

本学では、大学での学びと社会での経験を結び付け、学生の学びの深化や学習意欲の喚起、自己の職業適性や将来設計について考える機会を学生に提供することを目的に、教育課程に「地域キャリア実習」というプログラムを位置付けております。この「地域キャリア実習」では、広く一般に募集を行っている大企業等のインターンシップだけでなく、北近畿を中心とした地域の事業所にて就業体験ができる機会を設定し、学生からは普段目につきにくい企業の情報に触れる機会を設け、将来設計について考えるための多種多様な材料を提供したいという意図も含まれています。

実習までのスケジュール

| | |
|---------|--|
| 10月まで | 協力企業への呼び掛け |
| 10月上旬 | 実習希望学生の募集及び選抜 |
| 10月中旬 | 実習に向けたオリエンテーション、学生の実習先決定 |
| 11月～翌2月 | 実習(各企業において5日程度) ※実習終了後、2週間程度で報告書を作成 |
| 3月 | 実習報告会 |

実習先

日東精工株式会社

細見いるな

実習内容

実習は、11月4日から11月6日までの計3日間の日程で実施された。各日における実習の内容は、主に以下の通りである。

【1日目】

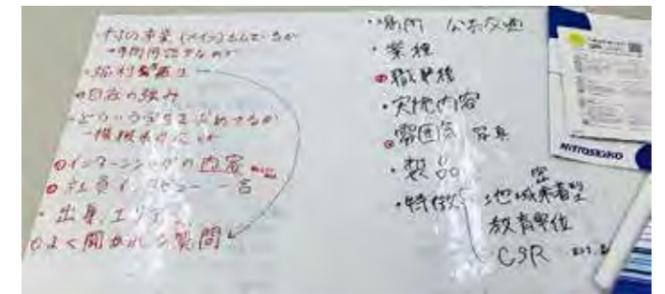
会社紹介
ビジネスマナー教育
人事課就業体験の教育単位制度の入力作業
学生向け企業PRチラシ作成体験
→大枠の構成について

【2日目】

学生向け企業PRチラシ作成体験
→情報収集

【3日目】

学生向け企業PRチラシ作成体験
→社員インタビューと総仕上げ
工場見学
→八田工場で、ねじやその他の部品作りの見学
紙粘土でねじ作り体験
質疑応答



実習を終えての学び

日東精工株式会社のキャリア実習を通して、地域密着型経営でグローバルに活躍されているメーカーについて知る貴重な機会となり、事務職の仕事内容や雰囲気、やりがいなどを学んだ。以前から、事務職の志望を軸に就職活動を考えていたが、「なぜ事務職を志望するのか」という根拠が曖昧で、「そもそも事務職の業務内容とはなにか」と理解が少なく、漠然とした就職活動を行っていた。そのため、キャリア実習を通して、自身の事務職に対する考えや思いを確かめ、将来の方向性を明確にしたいと思い参加を決断した。

実習で、会社の事業や歴史、地域との関わり、CSR活動などを細かく学んだり、ビジネスマナー教育で自身のマナーが低いことを痛感したり、工場見学と紙粘土ねじ作りでは、ねじについて原材料から製造工程、出荷先、ねじが活用されている製品などを学び、ねじとの身近な生活について考えたりと、多くの刺激を受け視野を広げることができた。

特に実習を通して学びとなったことは、学生向け企業PRチラシ作成体験である。今まで、インターンシップに参加して与えられたものから学びを得て、自身の中に取り込み、考えるということが当たり前であった。今まで、受け手側のみの姿勢で活動してきたので、サービスを提供する側の立場になり企画を考え、チラシを作成することが新鮮で、より企業

理解を深めることに繋がったと感じる。チラシの受け手にとっては、限られた情報の中で企業を知り、自身の中で興味関心があるかないかと判断をする。そのため、企業PRチラシには莫大な企業の魅力情報を厳選し、可能な限り最大限にPRをしなければならぬ。だからこそ、情報収集が大きな鍵であり、ここが実習活動でのポイントだと気付いた。就職活動を行う学生側でしか物事を考えてこなかったため、受入れ側の準備や苦労、思いなどを疑似体験することができた。そしてこの経験から、インターンシップに参加する姿勢や熱意、事前準備の重要性を学ぶことができ、今後の就職活動に向けて積極的に活動をしていかなければならないと感じた。

また、就職活動は自身の人生を大きく変える重要なターニングポイントであり、後悔のないように活動をしなければならぬ。そのため、学生の内にできることをコツコツと行い、一つの視点や固定された考えで物事を見定めて判断するのではなく、何事も挑戦する勇気が大切であると学んだ。コロナウイルスの影響により、イベントの中止やオンライン化が多い現状を悲観し、悩むのではなく前向きに考え活動を継続していくことが重要であり、不透明な将来を後悔のないように自身で切り開いていきたいと思う。

実習先

京都府中丹広域振興局

細田菜々子

実習内容

実習は、11月9日から11月13日の計5日間の日程で実施された。各日における実習の内容は主に以下の通りである。

【1日目】

京都府舞鶴総合庁舎にて実習内容の確認、取材準備、綾部市のせんだん苑こども園にて保育士の方に取材、記事編集

【2日目】

バザールタウン福知山、グンゼにて社員の方に取材、あやべグンゼスクエアの見学、記事編集

【3日目】

PALET石坪さんの永福こども園・綾部市立病院の取材見学、赤レンガ倉庫・五老スカイタワーの見学、記事編集

【4日目】

PALET石坪さんの福知山市立病院の取材見学、記事用の写真撮影、記事編集

【5日目】

記事編集、担当者との編集会議、舞鶴庁舎にて完成した記事発表



実習を終えての学び

京都府中丹広域振興局の実習を終えて、企画・連携推進課の仕事内容や、中丹地域の魅力や取り組みについて詳しく知ることができた。私は府という行政機関について、市役所などとは違ってあまり住民の方と関わる機会はないのかもしれないというイメージを持っていた。しかし今回の事業のように、企画・連携推進課では実際に外に出て民間の方とも接する機会もあるということを知った。また、取材させていただいた4名の方々は、それぞれUターン(大学を出た後地元就職)とIターン(県外から中丹地域に就職)であったので、各視点から見た中丹地域の魅力を聞くことができたとともに、今後の自分の就活の参考にもなった。今回の実習の目的は、「たんたんで働く」に掲載していただく記事の作成であったが、取材を通して保育園、病院、スーパー、製造会社など、様々な業種の方々とお話を伺うことができたのは、非常に貴重な体験であったと感じる。この実習で印象に残っている点は、記事を書く際に「誰に読んでもらうのか」を意識したことである。私は今まで取材や記事編集に携わった経験が無かったため、上手くできるか不安な点は非常に多くあった。しかし、事前に担当者の方に実習内容や取材先について詳しく説明していただいたので、事前に取材での質問内容などを準備して臨むことが

できた。また、今回作成する記事は高校生向けのチラシに掲載されるため、高校生に興味を持ってもらうにはどのような文章を書けばよいか、質問項目はどのようなものがよいか、彼らが知りたいことはどのようなことなのか、などを意識しながら取材と記事編集を行った。普段大学で書いているレポートとは異なるため、会話形式にして読みやすくするなど工夫をしながら編集したことが新鮮であった。この実習に参加することで、広域振興局の仕事内容や中丹地域における若者の移住・定住促進事業への学びを深めるとともに、取材や記事編集などの新たな経験も積むことができた。将来は自治体で働きたいと考えているため、今回の実習で得た学びを活かし、地域に貢献できるようにしたいと思った。



実習先

但馬信用金庫

森本啓太

実習内容

実習は、2020年11月13日、11月27日、12月4日の計3日間の日程で実施された。各日における実習内容は以下の通りである。

【1日目】

オリエンテーション
業界研究(金融業界)
企業研究(但馬信用金庫)
「働くこと」への理解
プレゼンテーションテーマ決め
信用金庫の4大業務
時代の変化に対する信用金庫の取り組み
札勘体験
社会人マナー講座

【2日目】

企業訪問(Maison Def、とど兵)
商店街散策(Artisan Avenue、カバン自販機)
事業支援部の取り組みについて(創業支援:地域クラウド交流会)
豊岡カバン×インフルエンサーによるビジネスマッチング(質問会見学)

【3日目】

プレゼンテーション
フィードバック
職員との座談会



実習を終えての学び

但馬信用金庫での実習を通して、信用金庫職員として最も大切なことは「お客様や企業からの信頼の獲得」であると学ぶことができた。信用金庫はメガバンクや地方銀行と違って「利益第一主義(営利主義)」ではないということを最初にお話していただきました。過去の経験(お客様や企業とのお取引等)についてお話を伺った際も、常に「お客様・企業第一主義(非営利主義)」であり、地域経済の発展及び地域住民の生活レベルの向上のために活躍している「信用金庫」の姿により関心を寄せるようになった。また、信用金庫で働く上で欠かせない「信頼」は、日々のコミュニケーションから築き上げられていると強く感じた。商店街を散策している際も、職員と地域住民が



にこやかに何気ない会話をしているのを見かけた。業務以外の場から職員と地域住民の近さを体感し、地域密着型経営を事業方針に掲げる但馬信用金庫の強みを実感することができた。実習への参加を通して、インターネット上や企業パンフレット等からは知ることができない「企業の日常」の部分に触れることができた。また、分からないことや気になったことを直ぐに相談できる環境であったため、業界や企業への理解をスムーズに深めることができた。今後は、実習で得た知見を「同業他社の分析」や「他業界の研究」に活かし、就職を希望する企業をよく知った上で選考に臨めるよう準備に取り組む。自身の将来としっかり向き合い、後悔のない就職活動ができるよう努めたい。

新しい京都の公立大学



福知山公立大学

The University of Fukuchiyama

地域経営学部 地域経営学科/医療福祉経営学科

情報学部 情報学科(2020年4月開設)

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
TEL.0773-24-7100 FAX.0773-24-7170
<https://www.fukuchiyama.ac.jp>

